
幸福の天秤

笛吹葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福の天秤

【Nコード】

N2965W

【作者名】

笛吹葉月

【あらすじ】

「次の満月は、死を望まずに眺められますように」 月女神が守護する小国マーニア。とある役目のために王都へ上った少女ベルカナは、二年前に死んだはずの第一王子ウィアドと会う。

*

喪失の王子と神話好き田舎娘による、静かな一歩への物語。

プロローグ

讃えよ 蹄の軌跡

喰らう者は 海の屋根色

御者台の乙女 沼に住む獣の眷属

木の壊し手と共に 大いなる天球を駆ける

いにしえの大地に 乙女の加護あれ

ふたりの息子達が 黄昏を引き連れる刻まで

昼過ぎまで降っていた雨はとうに止み、青色を追おうとする橙の光が、そこにいる人々の黒い服をどうにか色彩に染めてやろうと手を伸ばしていた。遮られれば途端に自身も黒色の影を広めるだけだというのに、その弔いに参加した人々の喪服を、物言わぬ石板を、刹那の温もりで触れようとする沈み際の陽光。

国の礎たる尊い犠牲も、今となつては単なる石碑。整然と並んだ終末の記録に、今日、新たな頁が加えられる。

少し背丈の高い芝も名残の露が重たくて、新鮮な花が供えられたばかりの真新しい大理石板に頭を下げる。

ハンカチで目頭を押さえすすり泣くのは貴婦人達で、俯き肩を震わせているのは故人の同僚であった剣士団員ら。皆が悲しみに暮れる中で崩れ落ちそうな体を互いに支え合う老夫婦は、愛しい息子ばかりでなく、流すことのできる涙さえ枯らし失っていた。

黒の集団からおもむろに進み出たのは、銀色の髪少年。年の頃は十二、三といったところだろうか。幼くか細い体には、質の良い黒の礼服は不思議なほど似合い、大人達の視線を一手に背後へと受けながら、彼はまるで動じる様子もない。

泣くこともせず、じつとその墓を見つめて佇む少年。死ぬことの意味がわからない年齢ではないだろう、葬列が歩む目的を知らないわけでもないだろう。だが彼は、仮面を被ったが如くひたすらに無表情であった。

静かに跪く、たったひとり。小さな手指がなぞる文字列は、名誉の殉死を遂げた剣士を称えるための美しく陳腐な詩と、彼が永久の旅路へと踏み出した日付。

剣士の命日としてそこに刻まれた日付は、この国の第一王子ウィアド・アルスヴィズの二十二回目の誕生日だった。月の綺麗な晩……祝いの席にて暗殺者の手から王子を救った護衛は、次期の剣士団長を期待されるほどの将来有望な若者であり、第一王子の無二の友でもあった。

無慈悲なる死よ 汝の吐息は蒼く冷たい

しかし見よ この勇猛なる若者の焔の如き生を

彼の者は真実に生き 忠義に散った

忘るるなかれ友よ 彼の者が遺した希望を

戦士アルジズ ここに眠る

雨上がりの湿った風にさらわれた銀髪を気にする風もなく、小さな唇を噛んだ少年の名は、ウィアド・アルスヴィズ。

前途ある若者の死を悼む詩と共に墓碑に刻まれた日付は、彼ウィアドの二十二回目の誕生日だった。

あの日ひとりの剣士が死んだ。そして王子も、また。

第1話

讃えよ 妖精の栄光

呑み込む者は 戦女神の涙色

麗しき天の花婿 槍の支配者の雷

木に下されるのは 永久の腕輪

讃えよ 蹄の軌跡

喰らう者は 海の屋根色

御者台の乙女 沼に住む獣の眷属

木の壊し手と共に 大いなる天球を駆ける

槍の騒音 止みてのち

血の氷柱とその岬 鷲に餌を与える者 虐殺の露 すべては眠る

武器の気候は穏かに 木材の悩みは失せる

蛇の隠れ家を示す腕輪 壊した者に心の価値を

とこしえの大地に 花婿の加護あれ

いにしえの大地に 乙女の加護あれ

ふたりの息子達が 黄昏を引き連れる刻まで

「見事だ」

玉座から降った言葉に、今しがた古の詩を詠い終えたばかりの少女ベルカナは、光栄です、と呟いて深く頭こぶしを垂れた。

賛辞は賛辞に違いない。たとえどれほど疲れた声音で紡がれたものだったとしても。

「解釈を申せ」

国王の命令が広間に低く響く。そこにいるのは王と若い娘と、あとは数名の衛兵。

満ちた沈黙は、疲弊も滲んではいたものの、確かな安寧の証明。

大陸の半分以上を占める帝国の傍にありながら、この国マーニアは現実はどうであれ 中立国を謳っている。戦力として保持するのは、自衛のための剣士団。自国は自国で護らなければならないから。

大陸に存在する中立国、つまり本来ならば不可侵の大地というのはふたつ。それは古代の詩にもうたわれている。

「妖精の栄光」と“天の花婿”は太陽、つまり隣国ソーリアの守護神ソールを表し、それを“呑み込む者”とは金色の狼スコルを示しています」

マーニアの東に隣接するもうひとつの中立国、ソーリア。守護神は美しい青年の姿で現れるという太陽神ソール。

「二節にある“蹄の軌跡”や“御者台の乙女”は月、つまり我が国マーニアの守護神マーニを、それから“喰らう者”は銀色の狼ハティを表します」

そしてこの小さな国を守る月女神マーニ。

それぞれの神が与えるものが祝福であるのなら、災厄を下す役割を担うのが二頭の狼 スコルとハティだ。

「これら二頭の獣は“沼に住む獣”^{フエンリル狼}の眷属であり、四節にある通り、世界の“黄昏”を導く日まで守護神に仕えるのです。三節は太古の争いを喻えたもので、腕輪は主君あるいは王の
「よい、もうよい」

王は彼女に最後まで語らせなかった。どこか投げ遣りに聞こえたのは呆れたからでも、満足したからでもない 飽いたからなのだ。或いは、最低限の基準を満たしていると見たからか。

ベルカナは止められなければいつまででも床に向けて語っていたろう。どこか虚しい気持ちがあったことは否定できないが、顔を上

げる許可がない以上は仕方のないこと。それに、彼女はもう自身が採用されるといふ確信を抱いていたから、小さなことは気にならなかった。

「そなたの学の深さ、我らが国への愛はよくわかった」

仮にも学者の娘であり、自身も親と同じ道を志す彼女にそんな言葉を与えるのは、何とも無粋な振る舞いかもしれない。

だが学者の卵である以前に、数か月前に十八の誕生日を迎え、法の上でも大人となっていた彼女のこと。王がうんざりするほどの回数その言葉を口にしてきていることは重々承知していたから、いちいち眉をひそめてしまうような失態は犯さない。礼節であるとか言葉遣いであるとか、そういった些細な所作が、あくまでも形式的なものに終始してしまわないように気を付けるだけでよかった。

第一印象が大事　実家で病の床に臥せていることになっている彼女の父親が、彼女を王都へ送り出す時に散々言い含めた教えだ。

中立とは、周囲の国の策謀や思惑をもすべて受け容れるための場所。威を借る……と言ってしまうえばそれまでだが、武力で大陸を制覇しようという帝国の庇護を少なからず受けていることもまた事実。帝国にとって二国は他の中小国家に対する体の良い“楯”となり得るから、有事の際には帝国側が“剣”となるのは道理だった。

ソーリアとマーニアは、何れの主義・主張・立場に傾くことがあってもいけない。

……しかし現実には厳しい。

神々の大地は侵すべからず、だが、孤立した国家はやがて滅びるだろう。小国が生き延びるためにはそれなりの妥協と譲歩、折り合い兼ね合いが必要だった。それゆえふたつの国が帝国の眷属と見られることも皆無ではなく、ましてソーリアもマーニアも決して強国ではないため、政治的に複雑な問題に巻き込まれることは不可避。

とはいえ、名君として名高いマーニア国王の心労の種は内政や外交に関するものではない。

くすんだ白の髪と髭。向こう見ずな勢いが溢れることはなく、刻まれた皺の数だけ積み重ねた年月が滲み出る。老人と形容しても差し支えない容貌の国王には、慈愛に溢れた王妃と、二人の優秀な息子がいた。

賢い王に優しい王妃、美しく聡明な二人の王子。王は愛妾を娶ることもなく、謀反を企む臣もなく。まるで絵に描いたように幸福な家族の平穏は、しかし、唐突に崩れてしまった。

およそ二年前。王宮内で起きた、第一王子暗殺事件。

下手人は帝国に敵対する国が送り込んだ密偵で、王子を護衛していた剣士と刺し違えて死亡したらしい。

世間の通説では、犠牲者は下手人と剣士と王子の三名。ちょうど国王が王位を譲ることを考えていた時期のこと。皮肉なことにその日は王子の二十二回目の誕生日であり、王位継承を正式に発表するはずの場でもあったのだが。

だが、である。ベルカナがこの場にいる、国王が彼女に「頼む」と口にする……それらすべてが導く真実は世間の通説どころか、史書の内容まで書き換えてしまいかねないもの。

あの日の犠牲者は、二名だった。下手人と護衛の剣士のみ。

そう 厳密には暗殺未遂事件。第一王子は、まだ生きている。

だからこそベルカナは王宮に招かれたのだし、国王は憔悴しきっているのだ。

「こう言っではなんだが、本当に構わないのか？ もう故郷には戻れぬやも知れぬぞ」

「本来ならば父が参上するべきところ、力不足は重々承知しております。されどわたくしとて学問を志す者の端くれ。何よりマーニア

の永久なる安寧を祈る者として、わずかなりともお力になれるのであれば、本望でございます」

国王は傳かすく娘をしばし見つめた。

栗色の豊かな髪が垂れて表情はすっかり隠れてしまっている。だが最初に彼に向かつて父親の体の具合が悪いことを告げた時、その翡翠の瞳に宿る光は利発そうな明るさを帯びていた。十八という割には顔立ちが少々幼く見えるものの、同年代の娘よりも余程しっかりしているように思われたのだ。

むしろそれゆえに、依頼を承知されるであろうことが王には辛い。憐れみ混じりの視線には気付くこともなく、ベルカナは平伏の姿勢で黙したまま。

「……宜しい。では、そなたに頼むこととしよう」

「有難く存じます」

これではどちらが許可を出すのかわかったものではない、と王はひそかに胸の奥で苦笑する。

罪悪感がないわけではない。こうして無謀な頼みをするのは幾度目か。それでも一国の王たる彼にも、どうすることもできない問題がそこにはあった。

否、それ以上に。彼はひとりの父として、若き学者の娘へと希望を託すのだ。どれほどの犠牲があろうとも、決して諦めてはならなかった。後の世に残虐非道と言われようとも、救わねばならない宝物があった。

「ベルカナよ。どうか息子を……ウイアドを呪いから解放してやってくれ」

「御意」

彼女は縛られる。国王の命令に、そして、民に知られてはならないはずの真実に。

第2話

「わたくしはベルカナ様の身の回りのお世話をしよう仰せつかっております、侍女のセレスティナと申します。ウィアド様のもとへご案内いたしますので、どうぞ、こちらへ」

黒と白のエプロンドレスを身に着けた女性はそう言うや否や、ベルカナが礼を返すよりも先にくるりと背を向けてしまった。ベルカナは見られていないのをいいことに、今度こそ気兼ねなく眉をひそめる。

玉座の間をあとにした彼女は、年上の侍女の道案内に従って、件の第一王子が待つという部屋へと廊下を進んでいた。

窓から差し込む日差しは暖かい。
もうじき、昼を報せる聖堂の鐘が鳴るだろう。

セレスティナの高く結い上げた黒髪が揺れるのを眺めながら、ようやく案内されたのは質素な内装の小部屋。相応の応接用家具はあるものの、人が　ましてや王子が生活するには狭すぎる部屋だ。何せ、寝台すらない。

訝しく思いながらも、促されるままにソファアへ腰かけるベルカナ。その向かいに「失礼いたします」と断りを入れてからセレスティナも座る。二十代後半かそのくらいに見える青い目をした侍女は、すっと背筋を正してベルカナを見つめ、おもむろに口を開いた。

「ベルカナ様。ウィアド様より伝言を預かっております」

言って、彼女はテーブルの下から綺麗な彫刻の施された小箱を取り出す。中に入っていたのは色とりどり、大粒の宝石の数々。

「こちらを好きなだけ差し上げる、代わりに……お引き取りください、と」

「本当に？」

ベルカナの確認の疑問符は宝石に惹かれたからではない。本当に王子がそう言ったのなら、国王の依頼は初めから無理難題ではないかと、半分は驚愕の思いを込めて聞き返したのだ。

セレスティナがどう解釈したかは不明だが、緊張の面持ちで首肯したのを見て、ベルカナは思わず渋面を作る。王子が帰れと言っただなんて、そんな馬鹿げた話があるものか、それではまるで本人が解呪を拒んでいるようではないか。

「……いいえ、結構です」

文句をぐつと飲み込み、ベルカナは静かに首を左右に振って見せた。

「そのような石ころに惑わされるような覚悟でこちらに参ったりはしませんもの。陛下からも直々に命をいただいておりますし、一度決めたことです。必ず王子様の呪いを解いて差し上げます」

ここで帰るわけにはいかないのだ。何より、自分自身のために。堂々とした態度が功を奏したか。青い目を瞬かせていたセレスティナだったが、やがて小箱の蓋を閉じると、詰めていた息を吐き出して、ようやく小さく微笑んだのだった。

「……お強い方」

「光荣ですわ」

ベルカナも微笑み返す。しかしその笑みの曖昧さに気付かれてはならなかった。王子を解放するのとは別の、もう一つの目的を知られるわけにはいかないのだから。

「実際にお目にかかって、とてもお若い方なので驚いたのですけど。……御父君のお体の調子は如何ですの？」

「ええ、まあ……実家には母や兄もおりますし、心身に余程の負担がかからなければ心配はないと思います。お気遣い、ありがとうございます」

「お兄様がおられるのですか？ まあ、羨ましいですわ」

ころころと表情を変える侍女をベルカナは呆気にとられて見ていた。「どうかなさいました？」と尋ねられた時でさえ、ぼんやりと

「いえ」と返すばかり。

初対面での印象からこうも変わるものなのかと驚いていたのだ。こちらの方が、妙な緊張を強いられないから良いかもしれないが。

「……あ、あの。陛下もどこかお体の調子が？ 顔色がよろしくないようにお見受けしましたが」

「陛下も王妃様も、やはりウィアド様のこととて心を痛めていらつしやるのですわ。加えて、もうすぐ各国の長がマーニアで会談を行うでしょう？ 北の大地に住む魔女達についてのことですし、またムンデルフアリ国が擁護派にまわってしまえば、三度の議論先送りになりかねませんもの。本当なら陛下もウィアド様の弟君のスヴェル様に玉座をお譲りになる心積もりでいらしたみたいですけど、スヴェル様はまだお若いという声もちらほら」

「は、はあ」

困惑を隠そうともしないベルカナの相槌に、セレスティナははつとして口元を手で覆った。

「あら嫌だわ、あたしっしたら！ 久しぶりにお話できるのが楽しくって、ついつい喋り過ぎてしまいましたわ」

顔を真っ赤にした喋り好きな侍女に、ベルカナは「お構いなく」と笑って片手を振り、どうやら付き合いくくはなさそうだと密かに胸を撫で下ろす。これから長丁場になることは目に見えているのだし、少しでも過ごしやすいに越したことはない。

「で、では」

立ち上がったセレスティナは、一瞬その表情を翳らせる。

「……わたくしもこのようにことをしたくはなかったのです。ただ審査が」

「審査？」

呟かれた言葉。疑問に対する返答はない。

顔を引き締めた彼女はすっかり侍女の体で、扉を開けて待機している。合わせて腰を上げたベルカナは、侍女が身を強張らせる理由くらい理解しているつもりだ。

「どうぞ、貴女様には彼のお方の呪いを解いて差し上げて欲しい。
……ベルカナ様、今度こそ、ウイアド様のところへご案内をいたします」

*

初めてその部屋に足を踏み入れたベルカナは、それまでの認識を幾分か改めなければならなかった。王族の私室というのは、どうやら、広ければ良いというものでもないらしい。

決して大きくはない。が、特別なのだという印象を与える部屋だった。それは先に王子の部屋だという情報を得ているせいかもしれない。或いは、贅を尽くした調度品の数々や上品な香の薫りによるものなのかもしれない。ともかく、一般的な家庭で育った少女にとっては、非常な緊張と興味を引き出す空間であったことは違いない。

「ウイアド様。此度^{こたび}“解呪”の任にお就きになった、ベルカナ様をお連れしました」

ノックと名乗りに対して無言であった扉を、躊躇なく開いて入室したセレスティナは、数歩を進んでようやく王子へと訪問の理由を述べた。

王子。

ベルカナの視線の先には柔らかそうな革張りの椅子が、背を向けて置かれている。背もたれから少しだけ覗いた銀色の髪。そこへ向けて、セレスティナは頭を下げている。

「ティナ。帰るように伝えろと、私は言ったはずだが？」
重々しい、けれど些か高い声。とても成人男性の声とは思われな
いような。

椅子が軋み、紺青の衣装の裾がするりと床に垂れた。

「また“審査”を通ったからか？ ティナ、君の主は私だ。父上じやない」

「申し訳^ございませぬ……。ですがこの方はきつと！」

「もうよい。私が話をつける」

ベルカナ達の方を向いて立つ少年は冷ややかに言い放つと、おもむろに腕を組み、睨むように新参者を見上げる。セレスティナは何か言おうと口を開きかけたが、ついに引き下がる他なかった。

新参者　ベルカナは彼を見下ろすことに抵抗を覚えながらも、膝を着くという行為もどこか違った意味を成すことのように思われて、ただその場に立ち尽くしたまま。

ふと。少年の口端が持ち上がる。微かに、皮肉げに。

「……驚いたか」

「こんな、ことが、実際に起こり得るのかと……驚いています」

小馬鹿にしたように鼻で笑ったところを見れば、ベルカナの反応は彼の予想の範疇を出なかったということだろう。

それでも、ベルカナは思った通りのことを正直に口にしたのだ。

王子の呪いについては、今回の任を請け負うにあたってもちろん話には聞いていた。だが心のどこかで疑っていたこともまた事実。いくら彼女が父親の影響で古今東西の伝承に造詣が深いとはいえ、物語内の出来事が現実が起こり得ると信じられるかどうかは別問題だった……むしろ伝承の類に詳しくなかった故に、神話の中の事柄を現実にあるものとして受け止められないでいた。

「これが私にかけられた呪いだ」

そこにいるのは齡十よわいと少しばかりに見える、少年。二年前に二度目の誕生日を迎えたはずの、マーニア国第一王子の、あまりにも幼い姿。

全体的に均整のとれた体つきではある。だが背丈はベルカナの胸よりも下程度で、手足は非力そうに細い。

それでも美貌の中で一際強い光を放つ濃紺の瞳は、ひどく大人びた様相で、見上げる眼差しに伶俐さを見て取れはすれど、臆する様子は微塵も感じられない。逆にベルカナの方が委縮してしまいそうになるほどの威厳は、見た目通りの年月のみを過ごした子供に出せるものではなかった。

“月女神の愛し子”と、美しい王子はかつてそう呼ばれていたのだ。

否、もうひとつ。銀色の髪に濃紺の瞳を持つ王子にはもうひとつ、呼び名があったのだが……

「あの日に私に向けられた攻撃は、単なる殺傷ではなく、存在の抹消を意図した魔術だった。時間を逆行させることにより、私が誕生した事実そのものを無に帰そうとしたのである。……だが、かの魔女の悪意は、勇猛なる剣士によって阻まれた」

あの日、というのはまさしく王子が呪われ、世間的に死んだ日。下手人が魔女であったという新しい情報よりも、剣士のことを口に出した時の苦痛に歪みかけたウィアドの顔が、ベルカナにとっては気になった。

「……込められた殺意は相当なものだったらしい。剣士の命を以てしても呪いは完全に防がれることはなかった。私は時を遡らされ、満月の日にだけ、元の姿に戻ることができる」

第3話

「もう一度言っ」

現実には見下ろしているはずなのに、逆に目の前の少年を見上げていたような錯覚に陥り、ベルカナは知らぬ間に腹へ力を込めて姿勢を正した。きれいな扁桃形をした濃紺の瞳は少しも揺らぐことがない。

「ここから出て行っただ方がいい。金も石も好きなだけくれてやる。私には必要のないものだ」

「お言葉ですが王子様、学者は着飾ることに魅力を感じません」

「賢い学者の頭ならわかるだろう。私の存在はいわば最高機密事項。関われば、解呪の方法を見つけ出すか、社会的に死ぬか。いずれかの選択肢しかあり得ない」

慌てて食い下がるも、ウィアドの返事には鋼の筋が通っている。頑なに彼女を拒絶する王子の言い分が、いわゆる優しさから発せられるものなのかどうか、ベルカナは判断しかねていた。彼女は誰かに言い負かされるといふ経験をそう多くしたことがないから、隙のない堂々とした王子の態度に少々の焦りも感じていたのだった。

「よいか。これは私の一存だ」

言い含めるようにほんのわずか和らいだ声音に、立場と年齢を改めて意識せざるを得なくなる。

眼前の少年は本当ならば齡二十四の、マーニア国第一王子。

対するベルカナは、他と比べて少しばかり書物に親しんできたに過ぎない、あくまでも平民の小娘。

生まれにも何ら接点なく、関わるはずのない環境で育った二人。

それが何の因果か、こうして同じ空間で相對している。

「父上に何を言われたかは知らないが、私が自ら解任したとなれば、責められることはないだろう。時既に遅しとはいえ、まだ充分に間

に合う範囲だ。この城の外へ、それでも不安ならば王都から遠く離れたところへ。本当に後戻りできなくなる前に、行け」

「お言葉ですが、」

「カークス老」

突如として飛び出してきた呪学者の名前にベルカナは口をつぐんだ。と同時にわずか警戒した。

「知っているか」

「……もちろんです」

呪学者カークスといえば、その道で名を知らぬ者はない大家である。類感から象徴まで多分野で優れた研究成果を収めたが、専門は黒魔術と呼ばれる、悪意ある魔術。魔の法を使えるのは北方の大陸に住む魔女だけであるため、かの師は齡七十を超えて尚、自ら北の大地を訪れるほどの精力溢れた人物でもある。ベルカナ自身は、彼が著した書物を通してでしか老師のことを知らないのだが。

「彼は今どこにいると思う」

意味深長な問いかけ。ベルカナは記憶を探る。

そういえば一年程前に腰を痛めたらしく、それ以来は表舞台に出てきていなかったはずだ。そうそう頻繁に書を書けるはずもないから、かの老師は療養中だと聞いて安心し、それっきり。直属の弟子であればまだしも、学者の世界がそこまで連携しているはずもなし。まして見習いたるベルカナにとっては、記憶のほんの片隅に引っかかっていた程度。

ところでそれがどうしたというのだろう。呪われた王子が、優秀な学者の存在をこの場で持ち出す意味とは。

ベルカナの怪訝そうな表情が氷解しかけた頃合いで、ウィアドの指が一本、足元を指し示す。

「ここに」

「ここ」

すぐには把握しかねた少女だが、一瞬の後に背筋が粟立つのを感じた。絨毯、床、階下、さらに下、下……

「神学者タファト、医師グルークロウ、薬学師レーン、……」

淡々と挙げられていくのは全てその道の先駆者達、そして、この数年の音沙汰がない者達。

数えるのも馬鹿らしいほどの人数を列挙し終え、一呼吸分の間をおいて、王子は再びベルカナを見据えた。濃紺の瞳はどこまでも深い色で、考えどころか上辺の感情ですら読み取ることが難しい。それでも彼は少女の未来を視る。だから、告げる。

「皆、この城の地下牢に。言ってしまったえば軟禁だ」

生きていることを喜んで良いものか。ベルカナが思考を練る間にも、王子の淡々とした言葉は続く。

「もはや彼らに表舞台へ上がることは許されぬ。陽を見ることさえも、許されぬ」

「私と関わったからな」、小さくウイアドは付け足した。「黙秘の約束を、父上は信用なさらない」。

呪われた王子などと他国にどうして言えようか。それどころか自国の民に明かすこともできない。安寧に波紋を投げ掛ける前に、彼は自ら身を引いたはずだったのに。

誰も彼もが苦しんでいる……状況を目の当たりにするにつけ、ベルカナの心に微かな炎が生まれる。

根拠のない自負を嘲笑うかのように先走る義務感、明るく白いままだと信じていた城内への軽い失望と納得、それと、別の目的を思った時の罪悪感。

様々な思いが瞬時に駆け廻り、気付けば彼女は語気も強く主張を示していた。

「わたしが、必ずや」

「……」

ほんのわずかに、気のせいかと見紛うほどわずかに、ウイアドの瞳に宿る光沢がゆらりと動いたのをベルカナは見逃さなかった。機を逸しないよう、畳みかける。

「必ず貴方の呪いを解いて差し上げます。半生を捧げることなど、

元より承知の上」

「己の置かれた立場を忘れるな。冷静になれ」

平淡だった顔を洗面に作り替えてウィアドは少しばかり声を尖らせた。感情が露わになったことこそが揺らぎの証明。本人は気付いていないのかもしれないが。

されどベルカナとて背負うものがある。大きさは眼前に立つ少年のその比ではなかるうが、彼女の抱く望みも蔑ろにされてはならないものなのだ。

「わたしは、きつと厳密には、学者ではありません」

「……何？」

諸刃の剣を、抜く。

「知識と経験の不足もそうですが、元々、古典や聖典の収集家に近いのだと思います。もちろん究める努力は怠りません、けれど広々様々な伝承に触れ将来へと保つことを目的に、父をはじめとした研究家達に師事していました」

案の定、ウィアドは形の良い眉を軽くひそめた。知識を持つ者として重宝されるのは学者や医師が常で、しかも、高名な師でも齒が立たなかった難題に単なる収集家が挑む……何とも馬鹿げた話だ。

鉄壁を崩すため、彼女は自分の弱点を晒すべきだと判断した。ベルカナにとつては賭け。少しでも言葉の選択を誤れば自分の首を絞めることになる。

「解呪の新たな糸口を……神話と幻想の中にあるかもしれない答えを見つげるため、わたしはここに来ました。父もそれを承知して送り出してくれたのです。……わたしはこの国が、この土地に伝わる神話が好きです。女神マーニも、銀狼ハティも」

「私の運命を趣味にするとは、無礼な」

「いいえ、いいえ王子様。この国と礎となったマーニやハティに感謝しているからこそ、わたしは国を率いる陛下のお力になりたい……貴方の、お力になりたい。やってみなければ、わかりません」

必死で食い下がれば、沈黙。語った言葉は真実であったが、これ

らが全てというわけではない。おろおろとしている侍女の姿を目の端で捉えながらも、少女はただ審判を待つ。

やがて先に視線を逸らしたのはウィアドだった。

「……哀れな娘だ。まだそのような世迷い言を申すか」

根負け、というよりも諦めたのだと 彼が纏う空気は、再び色褪せていた。

「ならば好きにするが良い。私は忠告、したのだからな」

望んでいたことが実現したというのに、ベルカナはどこか腑に落ちない感じを抱いていた。これで本当に良かったのか……自問に答えられない理由は、少なからず後ろめたさが尾を曳いているからに違いない。

紺青の衣が翻りウィアドの曇った顔が見えなくなつて、それ以降のことを彼女はよく覚えていない。

気が付くとどことも知れぬ廊下の真ん中で、セレスティナに両手を握られ、満面の柔らかな笑みを向けられて。

「やりましたわね」

嬉しそうな侍女に合わせて持ち上げた頬は、引きつって見えなかっただろうか。薄らと汗を掻いているくせに口内がやけに乾いていることにやっと思い至った時には、既にベルカナは自分の進む道筋を強く描いてしまった後だった。

*

その夜。ベルカナは、実家に宛てた手紙を書いた。

第4話

生あるところに死がある。そうであるならばやはり、死あるところに生があるのだらう。

頭ではわかったつもりでいても、後者にどうにも納得できないような気がするの、自分が現在生きているからだらうか、それともそもそも死者が思考することがないからだらうか。

いくら呪いの類を用いても死は覆らない。不可逆の変化は、だからこそ、生者を苛む。

ウイアドは椅子に納まったまま、膝に置いた自分の手を見下ろした。

小さな手のひら。他国に勢を示すべく王族の嗜みとして身に付けた剣術は形を重視するもので、演武以外で用いることはほとんどなかった。それでも未だ消えない肉刺は何度もそれを潰すほどに鍛錬した証だったし、あの日も帯剣してさえいれば、何か違った結果が得られたのかもしれない。

もう詮無いことなのに、とウイアドは瞳を閉じてゆったりと天井を仰ぐ。死は生へ返らない。とつくに諦めたことのはずが、胸の奥がちりちりと燻ぶるような、この感覚はどうしたことが。

閃光が友の身体を貫いたあの夜の光景は、数えきれないくらい何度も夢に見た。いつだって夢の終わりは、友の苦悶の表情と紡がれた呪詛が告げる。

『俺が死んだら、お前に天狼の星を降らせてやる』！

その度にウイアドは自分の叫び声で目を覚ます。そして汗に濡れた衣服の感触によって助長された寒気に震えながら、侍女も護衛も締め出した暗い部屋の寝台の上で、自らの息遣いにさえ耳を塞いで

眠れぬ夜を明かすのだ。

けれども今宵の彼が目を冴えさせているのは、いつ訪れるか知れない悪夢への入り口で足踏みしているためではなく、昼間に彼のところへとやって来た若い娘のおかげだった。

『わたしが、必ずや』

彼女はそう言って憚らなかった。一国の王子を前にしてさえ。

「馬鹿なことを」、しんと静まり返った部屋の中、ウイアドは小さく呟く。誰にこの呪いが解けるといつのか。仮に百歩譲って解くことが可能な呪いだったとしても、それを為すのが若い娘。それも代理で来たという少女。だとは到底思えなかった。新たな試みに期待するには、彼は落胆の苦みを味わい過ぎていた。

望みを持つから、叶わなかった時に失望するのだ。そうとわかってからは彼は希望しない、望まない。ただ一つ……自分の命が尽きることを除いては。

生きることは苦痛である。その命が誰かの命と引き換えにもたらされたものであれば尚のこと。

満月の日にだけ解ける呪いもそうだ。周囲は月女神の加護だと言っけれど、ウイアド本人はこれが友の言う“天狼の星”がもたらした災いだと信じていた。満月。月女神の力が最も強まる刻であると同時に、銀狼ハティが吼える刻。そんな宵には運命のあの日を否が応でも思い出すよう、刻まれた呪詛だと。友はきつと……己を恨んでいるだろう、と。

マーニアを治めているのは決して王だけの力ではない。それ以上にこの国では、“神話”が民の心の深いところに根付いている。

だから王族にとって、月女神マーニを祀った神殿に通うことは義務も同然であり、日課であった。ウイアド自身も二年前までは礼拝

を欠かさず、国の安泰を日々祈っていた。

あの日以来ウィアドが神殿に足を運ぶことがなくなっても、父王をはじめ周囲の人々は月女神に祈っている。祈願の内容に自分のことが含まれていることは重々承知していたが、それでも彼は、共に祈る気にはなれなかった。

満月の夜に友を喪い、自身は呪われ、彼が抱いた感情は神に対する憤りではなく納得だった。

銀系の髪、夜空の瞳　それはこの国に伝わる狼の姿に酷く似ている。

終末と災厄をもたらす獣を月女神が“愛し子”として守護することなど、あり得ない。

智も剣も、政治も体術も。多方面への才覚を表すにつれ、賛美と羨望以外の感情が向けられていくことに、人並み外れて唖かった少年は　呪いを受ける前から　気付いていた。誉れであれ異端は異端。神と化物は紙一重なのではないかと、両親が聞けば卒倒しそうなことすら思う。

少年は、不幸なほどに恵まれすぎていた。

幼少時代に周りを取り巻いていた、無邪気な言葉の刃。彼らに悪意はなかったのだろう。気恥ずかしさから年相応の振る舞いは上手く出来ないというのに、何をやらせても失敗することなどなかった少年のことを、“銀狼”の名で呼んだ子供達には。

そんな“月を追う獣”と心から親しんでくれたのが一人の剣士と、神殿の巫女だった。

だが今となつては三人が笑い合うことなどない。三人が揃うことは、もうない。

戦にでも身を投じることができればと思うものの、中立国にそんな物騒な話があるはずもなく。二年前、下手人を送り込んだのが帝国に不満を抱く東国の一つとわかるや否や、戦争を望む声が上がったのは事実だったが、その時は他ならぬウィアドがいきり立つ宰相

や剣士らを諫めた。己のために、これ以上の命が失われることが耐えられなかったのだ。

既に親友を一人。それから有能な学者達の余生を何年分も。更には両親の命までも削っているに違いない、数年前に比べて母親などはすっかり痩せこけてしまったから。

終わりにしたい。

幾ら思えども、叶わない。物理的にも精神的にも彼は八方塞の状況にあった。小さな形なりではどうせ剣を扱うことも儘ならないというのに、ウィアドの部屋からは刃物の類が一切取り除かれた。せつかく付随しているバルコニーへ至る窓は頑丈な鍵で閉ざされているし、食事も誰かが毒見することが常となっていた。

全ては自分を守るため。価値すらないかもしれない、“元”王位継承者の命を保つため。

それがむしろ苦痛であると、どうして父王達は気付かないのか。それでもウィアドは拒絶の言葉を放ることもない。価値のない生であるならば、せめて誰をも傷つけないように居ようと心に決めたらだ。

薄い唇から音もしないほどの溜息を吐き出し、椅子から立ち上がったウィアドは緩慢な動作でベッドへと潜り込んだ。途中で目に入った窓に切り取られた暗闇の下地に、幸いかどうか、月は描かれていなかった。

それでも彼は知っている。次の満月は、近い。

そういえば、昼間の娘は“神話”を研究していると言っていた。それも神学ではなく、御伽話の類に近いもの。そして何より。

『好きなのです、ハティモ』

災厄を愛する？

「……馬鹿馬鹿しい」

再度呟く。そんな言葉を口にするのはきつと腹に一物を抱えた者が、相当な能天気者だ。

ウィアドが思うにあの少女は恐らく前者。マーニア国第一王子へ与えられていた形容を知っていた上で、好意で好意を買おうと意図したのかもしれない。幼げな見た目とは裏腹、言い回しの端々に理知的な性が滲み出ていたように感じられた。それが学者の家に生まれたおかげであるかどうかまでは、判断がつかなかったが。

そういえば少女は父親のことを頻繁に口に出していた、と浅い微睡ろみの中で彼は思い出す。

代理という自覚ゆえ、というだけでもなさそうだった。果たしてあの強気な態度が誰かに言い含められた賜物であるかについても、話をしていけばわかること。踏み込んでしまったものは仕方がない、忠告はしたのだ。言い訳となることが納得いかないが、牢の中で悔いる時を迎えるまで、せいぜい付き合ってやろう。

新しい明日は、引導を渡すまでの日々を数えるためにあるのかもしれない。今宵見るのは悪夢か、それとも。

第5話

前の日とほぼ同じように、晴れた空に昼の鐘が響き渡った頃に、ベルカナはウイアドの居室を訪れた。

農民であれば畑を耕す合間、学者であれば朝からの集中力が途切れる頃、朝晩ほどしつかりとした食事ではなくとも軽食　小麦粉を練って焼いたビスケットや、果物の蜂蜜漬けなど　をつまんで休憩するのが常のこと。

多分に漏れず彼らの前にあるテーブルにも、素朴な一口大の焼き菓子と、いかにも繊細そうな器に淹れられた紅茶とが、行儀よく鎮座していた。紅茶と同様に焼き菓子の方もセレスティナが用意してくれたものである。扉の傍にじつと佇んでいる彼女が、それを差し出す瞬間に王子の顔を期待混じりに窺ったこと、そして王子がわずかたりとも視線をくれてやらなかったことを、ベルカナは半ば偶然に見てしまっていた。

微かに聴こえる小鳥の囀り^{ツルギ}。茶器から湯気と共に立ち上るのはハルベという香草の匂いで、ベルカナがいた田舎でも茶の香り付けに使われている。

そして部屋の中の空気は暖かく、少しだけざわめきの余韻を感じさせた。

何より、少女が訪れるよりも先に王子の紅茶は用意されていたのだ。それと空になった器がひとつ、テーブルの端の方に寄せられている。

「どなたかいらつしゃったのですか？」

挨拶を終えたベルカナが向かいに座る少年に尋ねれば、彼はああ、と口先だけで頷く。

「父上が。つい先程、お帰りになったところだ」

ぼかんと間の抜けた顔を晒す少女に対しても、彼は眉ひとつ動かすことなく。

「十日ぶりにお会いした。君のことをよろしくと言われたな」

そんなことまで言った。するとあの空の器は王が使用していたもので、片付けは不要とウィアドがセレスティナに言ったか何かしたのか。

それよりも。

同じ城に住んでいながら肉親と十日も顔を合わせない。ベルカナはその意味を考える。マーニア国王は息子を本当に愛しているようだったから、でなければ、軟禁させるとわかっていながら学者を招いたりするものか。“呪い”を忌避してのことではないというのはわかる。むしろそうそう出歩くことを許されない王子とは、詰まった政務を押し立てても頻繁に会いたがるはず。

今のベルカナが知る由もないが、なるべく面会しないようにと申し出たのはウィアドの側であった。多忙であろうことを慮^{おぼ}って、というのは半分は建前としてのこと。もはや継承権もない身に国王の時間を割かせるのは、弟に対する罪悪感もあり、構われるほどに生への未練が出てきそうで厭^{いと}だったのだ。

何にせよ、この場でそれを問うのは適切ではないとベルカナは判断した。注意し過ぎることはないくらいに慎重にあたるべき問題なのだ。王子が優雅に口へと運ぶ器の、容易に折れてしまいうような取っ手のように。

「さて」

カップを受け皿へ静かに戻し、ウィアドはおもむろに口を開いた。「何から話せば良い？ 当時の状況の仔細か？ 今の身体の状態についてか？ それとも呪いに関する私自身の見解を聞くか？ 何だっつて良いぞ」

医師であれ学者であれ、対峙する度に説明を要求されていれば、彼の投げ遣りな態度はもつともなことだった。その実、事件当日に交わされた会話はもはや淀みなく諳^{そら}んじることができるようになっ

ていたし、どの部分を語ることを求められているかも、言われずとも感覚でわかるようになってきている。

幸いなことにウィアド自身が説明に慣れたおかげで、必要以上の長い時間を調査対象として過ごさなくても済むようになっていた。解呪のために致し方ない詮索とはいえ、これまで城に招かれた者の中にはウィアドのことを興味深い事象の例として捉える者もわずかながらいた。そうでなくとも辛い記憶、あれこれと引っ掻き回される側としては、大いに不快感を抱いてしまうというもの。

「いいえ、その必要はございません」

ところがベルカナの返事は何を思ったものか。喉元まで準備していたいつも通りの説明を飲み込まなければならなくなったウィアドだったが、眼前の少女の穏やかな笑みに対して、どうにか無表情での反応に留めるだけの余裕はあった。

「必要がない、とは？」

「今日お話しするのはわたしです。いえ、多分これから、お話をするのは主にわたしの側だと思えます」

「何故」

落ち着きなく銀盆を抱え直した侍女の姿を目の端で捉えつつ、ウィアド自身ももちろん疑問に思うことをそのまま口にする。

疑問は興味の現れ。

彼が思わずはっとした時には既に、奇妙な少女は答えを紡ぎ始めていて。

「恥ずかしながら、わたしは他人に誇れるような学を持っておりません。ですから、ウィアド様のお力添えをいただきたく」

「神話や古典に明るいと言っていたな」

「はい、僭越ながら。古代の神々の物語や創世の歴史……そこにあるかもしれない手がかりを、共に探していただきたいのです」

ベルカナの言葉はこうだった。つまり、自分が語り手としていくつかの物語を話すから、そうした物語の中に解呪の糸口がないかどうかウィアドも一緒に考えて欲しい、と。

「別に……よかるう」

ウイアドはやや呆れながらも承諾する。未だその行為の根底にあるものが疑わしかったが、これまでのように一方的な推論を押し付けられるのではない点に好感が持てた。そうそう面倒なことでもない。

それに屈託のない笑顔を見せられるのも、悪い気はしない。

「ありがとうございます。……あ、」

「何だ」

「あの……ウイアド様ご自身の呪いについてのお考えは何いたく思います。もしもお気を悪くされなければ、なのですけれど」

「構わない。それこそ、今更のことだ」

ふ、と鼻で笑う少年の姿をベルカナは少し奇妙な気持ちで眺めた。組んだ脚は床につくかどうか、椅子の背もたれは主との対比で随分と大きく見える。そんな見た目にそぐわない態度は尊大というより、どこか達観している印象を受ける。違和感がある一方で納得もするが、何せ二十四の年と過酷な運命とが、この小さな体に詰まっているのだ。

ましてマーニアの第一王子は文武両道に優れた才能を発揮していたというのは有名な話。内面はベルカナが思っているよりももっとずっと高みにあるのかもしれない。

「もしや、やはり、神話の類についてもウイアド様はお詳しいのでしょうか……」

「いや」

嫌味でなく、心底不安そうなベルカナの言葉にウイアドは短く言葉を返す。書物を愛する彼だったが、あの一件以来、古典などで月女神や銀狼の名を目にすることに抵抗があるとは、口が裂けても言いたくはなかった。呪いの引き金となったのであろう神話の“真実”を知ることが怖いのだと、それを認められるところまでは自尊心を捨て切れていなかったから。

「私の、解釈か」

話題を変えるためにも呟く。これも何度も何度も口にした話であるから、考え込み思いつくような素振りには本当に素振りだった。

或いは内容自体ではなくて、ベルカナに語ってよいものか思案していた。もつともそんな逡巡は、先に「構わない」と返した段階で無意味なのだが。

「……私はこの呪いが満月の日にだけ解けることを、月女神の加護ではなく、銀狼の災厄だと考えている」

ベルカナは軽く目を見開いた。本来ならば祝福すべき解呪の刻、与えられたそれを災いとする王子の思考はまさしく意外なものだったのだ。

彼女の反応を見るにつけ、ウイアドはこれまで解呪の任に就いた誰しにも語ってきた言葉を伝える。

「俺が死んだら、お前に天狼の星を降らせてやる」

「えっ？」

「友が死ぬ間際、私に向かって遺した言葉だ」

忘れたことなど一度もない。記憶の中で、夢の中で。楯となり死んだ剣士が苦悶の表情でウイアドに言う言葉。

それが象徴するものが破滅の使者であることから、天狼の星は禍^{まが}星とされている。

彼の遺志が一体何であったのか。ウイアドでさえ呪詛だと思っ
ているのだ、高名な学者であつてもそれを否定するだけの根拠を持つ
ているはずがなかった。

「だからこれは私に与えられた罰なのだよ。彼には、私を恨む権利
がある。そして私には彼に恨まれる義務がある」

己のために目の前で犠牲となった親友。本当の喪失の痛みをベル
カナは知ることができない。けれども平穏な国にあつて、二年前の
ウイアドが人の死を平然と流せるほど麻痺した心を持っていたはず
もなく、表舞台から退かなければならなくなった自身の価値を如何
ほど問うたことか。

生きることには時に、酷く辛い。

話の中の存在だったウイアド・アルスヴィズという人間が、現実として色や形を帯びてくる。小さな罪悪感を飲み下した彼女は、その苦みに心の中でただ呻く。それで王子は解呪を拒んだのか。「絶望に身を浸すことは許されない。死から引き戻す刹那の安息……生きて、向き合つて、ずっと……。君も、彼が私のことを恨んでいると思つたらう？」

そつと、痛そうに。懸命に唇の端を上げたウイアドの力ない問いかけにも、ベルカナは何を答えることもできなかった。

*

結局初日は、ちょうど国王の前で披露したのと同じように、ベルカナが古代の詩を詠い、その解釈が概ね共通していることを確認するだけで終わった。

語句、比喩の意味するところ、表現技法、韻律、史実との対比……ウイアドの口から淀みなく紡がれる古典の知識には、内心ベルカナも舌を巻いた。さすがは“月女神の愛し子”と呼ばれていただけのことにはある。それとも一国の王子としての教養の範囲だったのかもしれないが、それは彼女の知るところではない。

ともかく、ベルカナはこれまで同年代　　というか父親以外とはあまり話が合わずにもどかしさを抱えてきたのだが、ウイアドと話し終えて気付いてみれば、一度もやきもきさせられることなく滑らかに神話について語る事ができていた。純粹に楽しいと思つた自分に驚いたのと、別の仕事があるのだからと浮かれた感情を押し込めようとする心と。

王子の居室から退出し、扉を背中にそつと溜息。やや遅れて、茶器類を持ったセレスティナも出てくる。

「お疲れ様ですわ、ベルカナ様」

「ありがとうございます」

笑顔を作るのに頬が軋んだような感があつてはじめて、ベルカナは自身が緊張していたことに思い至つた。ウイアドとの会話中は、趣味に傾倒するあまりの興奮を抑えることばかり考えていたものの、逆に慣れない上品な所作を心がけていたのが負担であつたらしい。自分にしては頑張つた方だ、と彼女は自らを褒めてやりたい気分であつた。

一方のセレスティナの方はと目を遣ると、黒髪の侍女が持つ銀色の盆の上には先程まで紅茶が入っていた器と、今もまだ焼き菓子の乗っている皿がある。ベルカナはとても美味しく頂いたのだが、未だに香ばしい匂いを漂わせているそれらは、少女の遠慮だけで残るような量ではない。

「ウイアド様は甘いものがお嫌いなのですか？」

会談中、菓子にはまったく手を触れようとしなかつた王子の姿を思い出し、ベルカナはセレスティナに尋ねてみる。答えはわかりきつたようなものだったが……王子が好まないものを侍女がお茶請けに出すはずがない。

やはりセレスティナの回答は否定だつた。城に住まう者独特の柔らかな雰囲気を帯びた苦笑を浮かべつつ、ゆるやかに首を横に振つて見せる。

「いいえ。お食事に添えられた果物などは普通に召し上がりますから」

「ではお身体の具合でも……」

首を傾げながら言いかけたベルカナを遮り、続ける。

「これはわたくしが作った菓子ですが。ウイアド様は多分……わたくしのことが、お好きではないのだとは思いますが」

第6話

夕餉を終えてから、少し。夜の帳も下りた頃、未だ休まない文官らの行き交う足音や侍女の忍び笑いが、ベルカナにあてがわれた個室の中にまで時々聴こえてくる。ゆったりとした疲労感に包まれた城内の空気も、彼女は割と好きだった。

食事はいつもセレスティナが部屋まで運んできてくれる。そこまです世話をしてもらうことも一人で食事をするのも、平民出身であるベルカナにとっては少々落ち着かないもののだが、あえてそれを伝えてまた手間をかけさせるのも悪いと思い、黙っている。

王子に嫌われていると言ったセレスティナ。あれ以上の言葉を続けることはなかったが、彼女もまた何かしらの悩みを抱えているのかもしれないとベルカナは思った。だがそこまで踏み込むことは、恐らく得策ではないだろう。下手な申し出は驕った自己満足でしかない。

栗色の髪を束ねて流し、質素なワンピースを身に付け机に向かうベルカナは、旅立つ際に唯一の供として連れてきた旅行鞆から一冊の本を取り出した。革の鞆は一応は余所行きのものだったが、長期の旅行にはいつも持参していたものだったため、お世辞にも見た目は綺麗とは言えない。

しかし、取り出された本はそれ以上にぼろぼろだった。隅の丸まった紙束を綴じた紐の色は様々で、修理しながら相当に読み込んだであろうことが一目でわかる。

持ち運びにも耐え得る小さく分厚い書物の表紙は、擦り切れてさえいなければ、『神話全集』と読めたはずだ。ベルカナが最も愛読している本。

いわゆる古典のひとつで、大陸に伝わる神話をまとめたもの。この町の図書館や学校にも一冊は置いてあるような書物だが、読破する者はまずそういないだろう。

しかしそれに興味を持った少女がいた。内容量が多い分あまり安いとほ言えないものだったが、小さな彼女は父親にねだって買ってもらった。それから数日は枕元に置き添い寝するほど喜んで、以来、少女にとっての宝物であり道標となった書。

ベルカナは昔から本を読むことが好きだった。中でも神話や伝承の類を好んで読んだ。

はじめは単に面白いと感じただけ。それが次第に人心を語り歴史を語り、道を示し助けとなることがわかり、いつしか探究心へと変わっていった。そして同じような動機から古典研究家となった父親に師事した。

裕福な家庭ではなかったが、ベルカナの興味の対象に関して父親は金に糸目をつけなかった。書物に興味を持てる暮らしは、農家などよりは余裕があったのだろうが、やはり父親がベルカナに自分の姿を重ねて見ていた可能性の方が高い。

大きな商家の次男だったベルカナの父は、家の跡を継ぐこともなく、興味に任せて書物に傾倒し、そして年月を経た後に少しずつ認められるようになったのだ。

とはいえ、王子曰く「地下牢に軟禁されている」学者達と比べればまだまだ無名。

どうして今回のことで父親が喚ばれたのか？

手によく馴染む本を軽く擦りながら、ベルカナは答えの出ない疑問をぼつっと思案する。代理ということて来たものの、最初の召喚は間違いない父に宛てられたものだった。

“代理”。

成人したばかりの少女は物憂げな溜息を吐く。

父親は、やは

り商家の出身なのだ。こんなにも大それた目的を娘へ託すなんて。

幾度目か知れない罪悪感を首を振ってやり過ごし、改めて手の中の宝物を丁寧に見る。

月女神ソールと銀狼ハティの神話。何度も開いてすっかり折り目のついた、お気に入りのお宝だ。

歴史と神話は似て非なるもの。どちらも古の物語ではある。しかし歴史は主義に塗れて騒がしく、神話は静かに統制を謳う。過去であり未来でもある神話には、終末へ至る道までもが記されているから、いつそう静謐で揺るぎない。そして、過去たる歴史には絶対的なものが含まれている。

それは“矛盾”だ。

神話に登場する彼らは人であり、獣である。植物であり、同時に鳥でもある。男は時に女となり、子は時に親を生む。一見して無秩序な、されど大きな。

頁を捲る。目に飛び込んでくる固有名詞の数々は、すぐにベルカナの頭の中で物語へと結びつき、まつわるものの記憶を蘇らせる。

ここマーニアと隣国ソーリア。二つの国を主とした神話にはやはり対となるものが出てくることが多い。

太陽と月、夜と昼、夏と冬、天と地、死と生、……。太陽神ソールと月女神マーニがそうであるように、対は男女として描かれることが多いが、二つの関係は全て従属ではなくあくまでも対等だ。

もしもマーニア国の王子の片方が王女であったなら、更になぞらえられたのかもしれない。と思いつつ、彼女はゆったりと文字を目で追う。

人間が暦を数えられるように生まれたという太陽と月。その物語の箇所には描かれた挿絵は二頭の巨大な狼。いずれの口も大きく開かれており、鋭い牙を剥き出しにして今にも光を飲み込もうとしている。

る。

金狼スコル、銀狼ハティ。千変万化の神口キは、滅びの巨狼フェンリルを生んだ。スコルとハティは、そのフェンリル狼の息子達だと言われている。

滅びを司る者の子孫はやはり災厄の導き手となったが、世界の終末 ラケナレク “黄昏” が来る刻まで神々に仕えるのだという。災厄をもたらすことは彼らの大切な役割と定められており、その一環として、毎日太陽と月を交代で追いかけているのだ。迫る危機こそが日を廻し、本当に彼らが追いついてしまった時こそが“黄昏”なのだ。

終末を含めた物語だから、災厄も滅びも忌み嫌われることはない。ソリアやマーニアの子供達は幼い頃にこうした神話を易しくした昔話に親しみ、悪戯をするとよく「スコル様とハティ様が追いかけてきますよ」と親に言われて育つものだった。

厭わしいものであつてはならないのだ、この神話の禍は。

ベルカナはウィアドの言葉を、ウィアドが口にした剣士の言葉を思い返し軽く唇を噛んだ。予定調和、なれど。物語の一節に書き加えられるために呪いをその身に受けたのだとしたら、何という悲劇だろう。

幼少の時から現王を超える逸材と呼び声高かった、第一王子ウィアド・アルスヴィズ。実際に政務に携わるようになってからは才能はさらに生かされ、父王の右腕として、各国の思惑の上手を行く策を練り、一方で治水事業や医療施設の増設など民のために尽力した。美しき白銀の王子は国民の自慢であつたし、誰もが彼の栄光の未来を信じて疑わなかつた。

月女神に愛された御子。その大きな幸福と釣り合わせるために、彼の人の天秤は傾いたのか。

本当に、彼は幸せだったのだろうか。

ふと浮かんだ考えの馬鹿馬鹿しさに、ベルカナは小さな呼気を鼻から漏らした。

不幸だったはずがない……のに。

ウイアドの懸念は杞憂に終わっており、少女は第一王子のもうひとつの呼び名を知らない。しかし聡い娘はどこか引つかかる感覚を覚え、頁を捲る手を止めていた。それは庶民の行き過ぎた妄想なのか、そもそも出過ぎた真似をしようとしているのか。

それにしても、人生を天秤に喩えるのは　あまりにも希望がない？

とうとう本を閉じる。机の上に置いたそれを押さえるように伏せ、ついでに瞳を閉じて、両腕に顔を埋める。

考えるべきことは多かった。が、そのための情報が少なすぎた。

頭の整理を、と試みたベルカナだったが、結局セレスティナが起こしに来るまで、その体勢のまま翌朝を迎えることとなる。

第7話

「陛下」

玉座に身を埋めた老齡の王の背後に、仮面の男。

王の間には彼ら以外誰もいない。ただ据えられた像の如き国王と、道化の衣装に身を包んだ 恐らくは 青年。

「陛下、ご機嫌麗しゅう」

絡みつくような声。後ろから頬に添えられた指の冷たさに、王は微かに体を緊張させた。仮面の男はクスクスと笑うと手を離し、老人の目の前へ軽やかに躍り出て慇懃に一礼。

それは、虚ろの空気を纏った男だった。白磁の仮面の口は三日月の弧を描いているのに、まるで退廃を引き連れた道化師だった。

「よもやあのような小娘を信頼なさるとは」

「おぬしは反対だったか」

「いいええ」

大仰に肩をすくめてみせる。ふわりと揺れた髪は昏い金色。不気味な笑みを湛えた仮面は、顔の傷や病を隠すためのものではないのだろう。

その者が立つところ、全てが舞台。その者が紡ぐ物語、全てが歴史。

仮面の男は数月前、突如として王の前に現れた。

敵意は感じられなかったとはいえ、胡散臭さの塊のよう。どこから城に入ったのかと驚く王は直後に、さらに驚愕の光景を目の当たりにすることとなった。仮面に道化の衣装ならば衛兵が引き止めたろう、廊下に行く侍女が気に留めたるう……だが実際には誰一人としてこの怪しい男に対する反応を見せなかった。つまり、見えない

らしいのだ、国王以外には。

賢い王はすぐに悟った。この者は、ヒトではないのだと。

「退屈しないで済みそうですね、ええ」

正体もその目的もわからないまま。今も胸に手を当て見上げる顔には無機質の笑顔が貼り付いていて、声音から、奥にある顔も笑っているのだらうと判断する。

息子のことで苦悩する王に、道化師は助力を申し出た。それが単なる彼の暇潰しであったと気付いたのは、幾人もの無名の学者までが地下牢送りになってしまっただった。

それでも、である。父は子を救いたかった。

それに、と王は心の中で何度目とも知れない言葉を自分に言い聞かせる。もしかすると、この仮面の男は、もっと崇高な目的を持っているのではないだろうか。

王がそう考える根拠はあった。彼がヒトではないこと、そして。

「では哀れな知識人達の様子でも、見て来ましようかね」

くるり回って掻き消えた道化師。その者はマーニア国王に対して、「ロキ」と名乗ったのだ。

*

これ以上贅沢な牢獄もあるまい。

そこは牢獄と呼ぶのも憚られるほどに普通の個室の様相を呈しており、「囚人」が快適に過ごせることを優先してしつらえられた空間だった。脱獄を防ぐために衛兵が監視してはいるが、広々とした個室に、剥き出しの地面ではなく敷物が敷かれ、古い毛布の代わりに寝心地のよさそうな寝台がある。

食べ物も物品も望めば何もかもが与えられる。ただ一つ、外の陽光を除いては。

そこでは研究に没頭することさえ自由だ。一度は敗北した、彼らの研究。歴史に負けたからこそ、彼らはこの地下牢に閉じ込められ

ている。

「やあ。調子は如何かな？」

ロキは誰に姿を目視させるも自在だった。もうすっかり顔馴染みとなった道化師に、気付いた地下の住人達は顔を上げる。初めは警戒していた衛兵達も、王の署名のある身分証明を見せられて以来、今では会釈までするようになった。

ちなみに彼は国王お抱えの芸人ということになっている。実際に詠ったり演じてみせたりしたことは一度もないのだが。

「おお、これは芸人さん。調子はそこそこですよ」

「それは良かった！」

いちいち大袈裟な応答を返しながら、長い通路を道化は進む。両側に並ぶ部屋は本来ならば罪人のためのものだろうに、この小国にそれほどの重罪人は滅多に現れることはなかった。民間の犯罪は民間で裁かれるし、それも罰金や鞭打ちなどの体罰がほとんど。歴史的にも有能な王家の転覆を図る者もいない。

ここは神話の国だ。ゆえに、人では抑えられない部分にまで統制が行き渡りやすい。

「……だから王子サマの呪いも解けないのだけど」

愉悦の滲む声で呟いたロキは、一つの部屋の前で足を止めた。道化師の来訪にも構わず、一心不乱に書き物をしているひとりの学者の姿があったからだ。

「馬鹿だね」

「はい？ つて、あ、道化師さん」

ようやく振り向いた老年の学者に、ロキは言葉尻を飲み込んだ口で「これはどうも」と愛想の良い挨拶を続けた。

「また、お勉強中でしたか」

「ええ、まあ。解呪の任を解かれたとは、まだ思っておりませんか」

第一王子の呪いを解くべく召喚された彼ら。王子にとって運命の日 数度の満月の日を迎えても芳しい成果を出せなかったために、

民に明かされない真実と共に地下牢へと放り込まれてしまった。

だが、なおも諦めていない者は多い。この老いた学者のように。その言を支えるものが自尊心であると知る道化師だったが、あえて指摘することもなく

「熱心な！」

と感動を装うに留めた。

老人が照れたようにはにかむと、ろくに手入れもされていない髭で顔面が見えにくくなる。疲れた心身にとってたまの若者の反応は良い活性剤となるのだろう。道化師が内心で嗤っていることなど、彼らが知る由もない。

「今度の“犠牲”はどのような方なのです？ 貴方がこちらにいらつしやる時は、何方かが新しく解呪の任にお就きになった時だ」

茶化すくらいの余裕は出てきたということか。学者の冗談混じりの問いかけにもロキは動じない。

「それが驚くことに、何と成人したばかりの若い娘さんで。父親の代理だとか」

「なんと……。それは本当に可哀想な」

絶句した老人は恐らく、己と同じように余生を牢獄で過ごさねばならなくなる、まだ見ぬ娘を憐れんだのだろう。結末は決まっていると知っている、偉業への自分の可能性を信じている。

ロキは嘲笑などおくびにも出さずに白い指を一本立てた。

「しかしあの娘さん、思わぬ切り札になるやも」

ワタシのようにな。

“道化師”は続く言葉を無音で紡いだ。そして、言う。

「ワタシは変わり、ワタシは出来事を生む」

「は、い………？」

ぼかんとする老人を置き去りにして、上機嫌な道化師は再び通路を奥へ進み始めた。そこにはまだ空の独房が並ぶ。次第に暗く。虚ろは次の囚人を待ち構えている。

「上が詰まっ
ていてはね、学問の発展は望めないのだよ。牢獄に入るのは耄碌モウロクした固定観念のカタマリだけでいい」

独白は誰にも聞かれない。聞こえたところで何にもならない。

「彼らがいつか青空を拝めたなら、少しは世界も進むだろうよ」

彼は変化し欺きすり抜ける達人。気紛れに事を起こしては、恩を売り恨みを買い、それでも不可欠な善悪の媒介。

その者がもたらすは破壊。その者が生み出すは秩序。

「大事な子孫の大地、気になるのは当然さ」

仮面の奥、愉しげに笑い。道化の衣装は……暗闇へと吸い込まれるように溶け消えた。

第8話

今日も、昼下がりの神話談義が始まる。

ベルカナが入室すると、ウイアドはいつもと同じように大きな椅子に腰かけ、宙に浮いた脚を組んでゆったりと待っていた。紅茶とスコーンを用意したセレスティナは扉の傍に。

切り出し方に困っているベルカナを気遣ってか、先に口を開いたのはウイアドの方だ。

「さて。ではいよいよ、君の知る物語を聴かせてくれるわけだな」
落ち着いた少年の声音にはくつろいだ響きがある。そこに相変わらず覇気と表情はなかったが、わずかながら興味を向けてくれていることに少女は密かに胸を撫で下ろす。

持参したあの本を取り出して机上に置くが、開くことはしない。
代わりに少しの間だけ翡翠の目を閉じ、それからさも今しがた思案したかのように小首を傾げて、静かに語り始めた。

「フェンリル狼を、ご存知ですか」
「当然」

ウイアドの返答は短く素っ気ないものだった。だがそれもそのはず、かの狼の眷属の存在は創世を語る上で欠かせないものだからだ。
金狼スコルと銀狼ハティの父親であり、千変万化の道化師トリックスターの血を受け継いだ巨狼、フェンリル。破滅をもたらす獣と予言され、その予言を恐れた者達により地下へと封じられた。災厄の使者は結果的に文字通りの礎となって、現在に至るまで大地を支えていると言われている。

「フェンリル狼は口を閉じられないよう、剣を口内に引掛けられた上で封じられているのだろっ。開け放ったままの口から流れ出た唾液が、川となった」

我が意を得たりとばかりにうなずくベルカナ。

「その通りです。この国に流れるヴェーン川だと言われていますね」
「あそこを調査するために神殿の関係者と揉めたからな。よく覚えてる」

肩をすくめたウイアドが零すのは、未だ王の補佐として政を行っていた時の話。何気ない呟きにも懐かしむような響きはなく、ただひたすらに淡泊な独白だった。

それでもベルカナは少し会話が繋がったことを喜ばしく思い、多少の脱線を承知で軽く身を乗り出す。そもそもが二人で解呪の手がかりを模索するという約束だったのだから、こうして王子の側から話をしてくれるのはありがたいことだった。

「揉めた……と仰いますと？」

「ヴェーン川は国外れの森から流れ出ている。昔からハティが棲むと伝えられている森だ、侵してはならぬと神官達が調査隊の立ち入りを認めたがらなかった」

神話が護る国であれ、理想だけでは人は生きていくことができない。政治と“聖事”。それぞれにも保つべき領分がある。

咳払いをした時に王子がばつの悪そうな表情をしたのは、ベルカナ自身の願望が見せた光景だったろうか。目線で促され、惚けたように白皙を見つめていた彼女は、内心で少しだけ慌てた。

「フェンリル狼が封じられる際に、その体を縛ったグレイプニルという紐があります。鉄枷でさえも引き千切る獣でしたが、“柔”の力にはとうとう敵わなかったのだとか」

「知っている。そのグレイプニルという紐、材料は、確か……」

「猫の足音、山の根、熊の腱、魚の息、鳥の唾、女の髻です」

「ああ。どれもこれも、手に入らない奇跡の品ばかりだ」

知らなかった、のではなく、思い出した、という反応を見せたウイアドは本当に神話にも明るいのだろう。まさか説明をすることもなく話が進むとは思っていなかったベルカナは、再度驚きはしたものの、知識を共有できることが嬉しくて笑みを深めた。

「お詳しいんですね」

少女の素直な言葉に、ウィアドは一瞬だけぎよつとしたように目を瞪る。

「では……フェンリルが縛られる際に、軍神チユールの腕を噛み切ったことも？」

「あ、ああ。知ってはいたが……」

「その失われた腕の意味も？」

「それは知らないな」

何でも知っているわけではない。当たり前だ。

それを示すことができ、ウィアドは密かに安堵していた。少女の語る機会を奪ってしまうことを考慮しただけではない。ただ知らないことがあることを伝えておきたかった。

心なしが早口で返された答えに、ベルカナもまた目を軽く見開いた。しかし些細なことだ、気を取り直して慎重に明るく物語を紐解いていく。

「フェンリルは縛られる際に、戯れであることの証明として、神々のひとりに腕を口の中に入れるように要求しました。彼らが封じつつもりであることを、フェンリルは伝えられていなかったのですね。グレイプニルを引き千切ることができないと悟るや否や、狼はその口を閉じ、勇敢なる軍神チユールの右腕を噛み切ってしまいました」

一呼吸。

「チユールが失った腕は“調停の腕”であつたそうです」

「調停？」

「はい。混沌の世となることを憂慮した彼は、法を司る神フォルセティにその役割を託しました。ゆえに世界から秩序は失われませんでした。だが、仇であるフェンリルが眠る土地にフォルセティの加護はなく、それでマールニアとソーリアでは太陽や月と狼達の間には友和がないのだと、そんな説もあるのです」

「なるほど。この国に馴染みのない神なのだ。フォルセティという名は、初めて耳にしたぞ」

淡々と呟く王子を、ベルカナは今度こそまじまじと見つめた。率

直な感想を漏らすウィアドの姿は、彼女が抱いてきた想像の中の貴族とは異なっていた。

無知を認められる人はそれだけで強い。限界を知るところから努力は始まるのだから。

努力。

もしかすると王子は天才ではなく、秀才と呼ばれるべきなのかもしれない。確かに生まれた時からある程度の素養はあつたろうが、それを高めようと努めなければここまでの誉れは得られなかっただろう。

それを思うと、天地ほど離れた別世界の相手にも途端に親近感が湧く。同時に、好奇心に満ちている澄んだ宵闇の瞳に、わずかばかり胸が高鳴った。

「どうかしたか」

怪訝そうに柳眉をひそめる美麗な少年。隠そうと顔を背けても、ベルカナの口元は綻んだままだった。

「いえ……それで、ですね。わたしはこの大地に調停の腕がないことを、必ずしも悪いことだとは思わないのです」

「日が進むからか？ 狼が追わねば世界は廻らない」

「それもあるのですけど」

破滅を前提とした神話。災厄すらも糧とできるのは、人の心だけ。「調停されなければ、確かに争いは消えないでしょう。しかし逆に言えば、私達は闘うことができるのです。滅びを知ってなお闘い続ける神々のように、苦難に立ち向かい、終末に抗うことが」

「……」

無駄だ、と糾弾する暇もなかった。ウィアドはただ呆氣にとられていたのだ。

なんとという前向きな解釈だろう。彼は古典の注釈書も解説論文も読んだことがあったが、これほど突き抜けた理論を広げられたのは初めてで、その理解には少々の時間を要した。

目の前で微笑んだ少女に、特別なことを述べたという気負いは感

じられない。それでも彼女は、破滅の物語にある小さな希望の灯を
掬い上げてみせた。まるで逆転すれば意味も反対になってしまふ古
代文字ルビのように。

「それは、何かの本で読んだのか？」

「いえ、わたしの勝手な解釈です」

でも、と続けて。

「証拠、といえますか。的外れではない証があります」

ベルカナは机上の古びた本を優しく撫でた。

「狼が生んだ川。ヴェーン、というのは古代の言葉で“希望”とい
う意味ではありませんか」

そう言つて微笑む。

数度の目瞬きの後。そうか、と呟いたウィアドの表情は、最初よ
りも随分と和らいだものだった。

第9話

「失礼いたします。夕食をお持ちしました」

扉を二度叩く音に続けて、すっかり聞きなれた侍女の声。黄昏た窓の外を見て、もうそんな時間かと、ベルカナは急いでテーブル上の書物を片付けにかかる。

「どうぞ」

銀盆を持つて扉を開けた黒髪の侍女はいつも、隙なく制服を着こなしている。今もまた器用に丁寧なお辞儀を試みせた。

「遅れてしまつて申し訳ありません。王子のところへ寄つていましたもので」

「いえ、全然構いません」

笑う。ベルカナ自身も時間が経つのも忘れて読書に没頭していたから、本当にまったく気にしてはいなかった。それよりもむしろ引つかつたのは。

「ウイアド様のところには？」

「ええ、お食事を運んで差し上げていましたの。……ああ、それと」
一通の封書を差し出すセレスティナ。送り主の名前は毎回同じ。

こちらは何度運んだかわからない便りを、いつも通りにベルカナへと手渡す。

「またお手紙が届いてましたわ」

「ありがとうございます」

笑みに少しだけ苦いものを混ぜつつ、ベルカナは受け取った封書を取りあえずテーブルの端に置く。

その横の空いた場所、着席したベルカナの目の前にセレスティナが皿を並べていく。王族基準では“質素”であるらしい料理は、庶民の食卓に慣れた少女にとっては十分に豪華なもの。切れ端ではない肉や魚が毎日食べられるだけで贅沢だと彼女は思う。

「お父君もベルカナ様も、筆まめな方なのでですね。やはり女の子を遠くへお出しになって、さぞ心配されているのでしょう」

「え、ええ、まあ」

食事に不要とわかつてはいても、ベルカナは無意識のうちに手紙を少し自分の方へと引き寄せた。誰かに読まれてはならないと、これまでの手紙も全て厳重に保管してある。

「セレスティナさんは、ウィアド様のお世話もしていらっしゃるのですか？」

些か強引に話題を変える。生真面目な侍女は、さして気にする風もなく答えを返す。

「はい。と、申しますか……元々わたくしはウィアド王子の専属なのです」

そういえば、王子の近辺にセレスティナ以外の侍女の姿を見たことがないと気付く。

「え……それではわたしのことまで、何だか、すみません」

「いえいえ、謝らないでくださいな。ベルカナ様がいらっしゃって、わたくし本当に楽しいんですよ」

お世辞などではなかった。無口な王子との事務的な日々の中に、代理とはいえ少女が入り込んでくれたことは、生来が話好きなセレスティナにとって文字通りの光明であったのだ。

ベルカナも照れたようににはにかむ。

「そう言っていただけだと嬉しいです」

けれど、と小首を傾げて。

「何もセレスティナさんおひとりに全てを任せなくても……。これだけ大きなお城なんですから、他にも侍女さんは大勢いらっしゃるでしょうに」

「それは仕方のないことですわ。ウィアド様は必要以上に人と関わることがお好きではないので」

「必要、だと思つのですけど……」

わずかにむくれたような素振りを見せたベルカナにセレスティナ

は笑い。次いで、微笑に少しばかり悲しげな影を帯びさせた。

「あの方は以前、王家から名を消してしまわれるおつもりでした。それどころか……死を、望んでいらっしやいました」

「え」

「きつと、今でも」

絶句したベルカナだったが、一方でどこかしら納得する。初対面の時からずっと感じていた虚無の空気。あの王子が纏っているふわふわとした危うさは、そういう理由から来るものだったのかと。

「全て、あの呪いのせいですわ」

軽く唇を噛んだセレスティナは、事件当日も宴に同席していたのだ。もちろん下手人と会話をしたことさえある。　魔女は、王子の身近にいた。

護ることは彼女の役割ではなかったとはいえ、祝賀の場が一瞬にして悲劇の舞台に転じたあの時、自身も呪いを受けながら友の名を叫んでいた王子の姿を忘れることなどできはしない。立ち竦むしかなかった己のことも。

「解呪が容易でないと分かり、ご自身に費やされる時間こそが無駄である……ウイアド様は過去に数回、ご自分でその命を絶たれようとなさいました」

王子の部屋の真下。開け放たれた窓から下をのぞき込み、小さな肢体が無惨に放り出されているのを発見したのはセレスティナだった。それ以来、その窓には嚴重に鍵がかけられている。

「今でこそ、陛下や王妃様のご尽力もありまして、あのように穏やかに過ごしておられたり、弟のスヴェル様に政に関して助言なさったりしていますけれど。本当はいつ」

「そこまで語り、はっとしたように口を手で覆う。」

「不謹慎なことを申し上げてしまいましたわ！　すみません、余計なお話を」

「いいえ……」

一旦は虚脱感に襲われかけたベルカナだったが、堪え、侍女を見

上げる。

王子のことをもっと知る必要があった。事の重大さを理解した今は、特に。

「あの、できることならその事件があった日のこと、詳しく知りたいのですが……。ウイアド様ご自身のことももっと知らなければ。何か、手がかりがあるかも」

頑なな意思を秘めた翡翠の瞳を、セレスティナは驚嘆の思いで見ている。本当に強い少女だと。

だからだろうか、王子に知られば顔をしかめられるような話も渡してしまうことにしたのは。

「当時の状況については、護衛の任についていらした剣士の方にお聞きするのが良いかもしれません。それと……ウイアド様は、ラグ様というお名前の、神殿の巫女の方と親しかったように思いますわ。今のウイアド様は神殿に通われることも、なくなってしまうかもしれませんが」

考えてみれば、王子との神話談義以外の時間をより有意義に使うべきだったのだ。ベルカナは今後の予定を思案する。だが。

「ささ、お料理が冷めてしまいますわ」

促され、顔を上げる。セレスティナはもう先程の話が夢であったかのように朗らかな笑顔を見せていた。吐き出してしまったことは彼女にとっても、良く作用したのかもしれない。

どこか温かい気持ちを抱きながらナプキンを用意するベルカナ。ふと声を上げて、不思議そうに首を傾げている侍女を見上げる。

「あの……ひとつ、提案があるので」

第10話

セレスティナは悩んでいた。

王子が笑わなくなつたのは、無口になつてしまつたのは、彼女が作つた菓子を食べてくれなくなつたのは。全て、何もかも……あの日から。

以前からどちらかと言えば饒舌な方ではなく、やけに大人びて飄々とした人物ではあつた。それでも表情はもつと柔らかかつたし、何より生き生きとしていたのだ、王宮の娘全ての憧れたる彼は。

自ら望んで表舞台から下がつて後。継承権すら失つた身に時間と労力を割かせることを良しとしなかつた王子だったが、願つてすぐに下野などできるものではなく。城内に留まる結論に落ち着いたとはいへ、自身で支障なく家事の類をこなすことは難しい。

ようやく渋々ながらも傍仕えを承諾したのは、侍女が一人と護衛が二人。その唯一の世話係こそがセレスティナだつたのだ。

多少妬まれはしたものの、かれこれ五年以上もの間、第一王子のために頑張つてきた彼女のことを仲間達もよく知っていたから、同僚の侍女らは快く背中を押してくれた。セレスティナ自身も当初は浮かれていたものだ。

しかし呪いを受けて以降のウイアドは、まるで別人だつた。見た目だけではない。むしろ内側　魂がどこか遠くへ行つてしまつたかのようなだつた。

ウイアド様はお亡くなりになつたのだと、不謹慎なことを囁く輩も少数ながら現れた。もう“月女神の愛し子”は戻つてこないのだと。実際、彼は幾度も自殺未遂を繰り返した。

けれど今はそれさえもなくなつてしまつた。本来ならば喜ばしいこと、なのだろうに。無気力な日々を繰り返す王子の姿は、彼が本来担つていたものの大きさを思えば一層、見ているセレスティナ

の胸を締め付けるのだった。

同じ空間にいたところで、必要以上の会話が為されることはない。それでセレスティナはいつも、ウィアドが食事を摂っている最中は退室し、終えた頃に再び皿を片付けに訪れる……というようにしていた。

だが今日は違う。彼女は伝えねばならないことがあって、少年が機械的に料理を口に運ぶのを眺めながら、機会を窺っている。

食器が擦れ合う音だけが響く、静かな室内。粗相の気配ひとつなく、慣れた手つきで食べ物を切り分けては黙々と平らげていく幼い少年。食事の最中に傍観者が一人増えたところで、彼にとっては些細な違和に過ぎないのだろう。

どことなく虚しくて、というか沈黙に耐えかねて、とうとうセレスティナは「ウィアド様」と声をかけた。

「お食事中に申し訳ありません。少々お話が」
ぴたりと動きを止めた少年は一瞬の間を空けてから、ナイフとフォークを置き、白いナプキンで丁寧に口を拭い、セレスティナを見上げた。

「……何だ」

ここまで耳を傾けてもらえることが逆に意外だった彼女はたじろいだが、それは表に出すことなく、ただ必要な情報のみを伝えようとする。

しかしまとめようとすればするほど、考えが上滑りするようない。思い返せば、こうしてきちんと向き合って会話をしたのはいつ以来だったろうか。

「お、お食事を一緒にしてもよろしいでしょうか？」

「……私と、ティナがか？」

「あああ、いえ、そうではなくてっ、」

わずかに目を見開いた王子を見、侍女は顔を真っ赤にしつつあたふたと手を動かす。伝えたいことの半分以上が抜け落ち、提案の内

容も内容。彼女自身はよもやこれほど緊張するとは思ってもおらず、怪訝そうにする王子の機嫌を損ねてしまったかと思つたのだ。

「っ……」

ところが次に聞こえたのは怒号などではなく、小さな、本当に小さな呼吸を漏らす音。

思わず固まるセレスティナ。

「君がそこまで取り乱すなんて、珍しい」

侍女でさえ対等に呼んでくれる白銀の君は、久しく私事で言葉を交わすこともなかった麗しの少年は　笑っていた。

確かにそれは笑顔と呼ぶには程遠い、本当にわずかな唇の歪み。

だが長年付き従ってきたセレスティナにはわかる。彼が凍てついた表情を微かに弛め、それを自身で気恥ずかしく思っているであろうことも、濃紺の双眸が逸らされたために読み取ることができた。

はつと我に返り言葉を続けた時にはもう、彼女は緊張など忘れていた。

「あのっ、わたくしではなくてですね、ベルカナ様が」

「あの娘が？」

「はいっ。わたくしがお二方のお世話をして差し上げていると申しましたら、氣遣っていただいてしまつて……おひとりでの食卓は寂しい、お食事を運ぶのもその方が一度で済むから、と」

正直、セレスティナは話している中身をよく覚えてはいない。ベルカナには申し訳ないことになるが、王子の許可がなくてもそれはそれで構わなかった。ウイアドと会話ができている、この状況がただひたすらに嬉しくて堪らなかったのだ。

それでもウイアドの側は何か思うところがあるらしく、元の無表情に戻りながらも、顎に軽く手を当て思案している様子。

「それは朝か？　夕餉だけか？」

「どちらでも。ウイアド様にお任せすると仰っていました」

やがて腕を組みつつ椅子にもたれ、ウイアドは軽くうなずいた。

「夕食だけならば構わないだろう。あまり頻繁に通つていては怪し

まれるかもしれないからな、それではあの娘が可哀想だ」

独り身の王子の私室に年頃の娘が通い詰める。如何なる背景があるにせよ、傍^{はた}からすればその行為は特別な意味を持ちかねない。

セレスティナはそこまで配慮が至らなかつた己を恥じた。と同時に、間違いなく民のための名君になるであろう彼の素質が無為に終わっていることを、悔しくも思うのだった。

「料理は彼女と同じものを出してくれないか。私が彼女に合わせよう」

「承知いたしました。きつとベルカナ様もお喜びになりますわ」

侍女は慕う王子に向けて腰を折った。

「それと、」

「はい」

「明日のために服を用意してくれ。今夜中に」

頭を上げた彼女に、否、どこか遠くに眼差しを飛ばし、ウィアドは驚くほどに色のない声を出した。

セレスティナの顔が強張る。対照的にウィアドの表情はまるで平淡だった。虚ろ、と言っても差し支えない。極力“明日”のことを考えないようにしているのだ。

「……」

再び気まずい沈黙が訪れた。

ウィアドは膝に置いていたナプキンをおもむろに畳み、ナイフやフォークを皿の端へと寄せた。

「すまないが、片付けてくれ」

大方食べ終えていた料理を下げるように要求すると、彼は片付けが途中であるにもかかわらず席を立つ。そしてそのまま併設されている小部屋　浴室へ。

「湯を浴びる。服はどこか適当に置いておいてくれればいい」

「は、はい」

セレスティナは皿を片付ける手も止めて、小さな背中が扉の向こうに消えるのをじっと見つめていた。

王子は“月に一度の日”が近づくにつれ、次第に落ち着きがなくなる。今回はベルカナが来たこともあってか、かなり平静を保っている様子だったのだが。やはり前日ともなると意識せずにはいられないのだろう。

明日は月女神の加護が強まる日、銀狼ハティが吼える夜 満月、
なのだ。

第11話

ウィアドは先刻の自身の言動を思い出し、湯上りで火照った頬を更に熱くした。

上手く、笑えていたろうか。

これまでも、セレスティナに悪いと思う気持ちがないわけではなかった。

社会の中での死は、彼の希望と状況の要望が合致した結果。当初は侍女を付けること自体を厭っていた。

だがいくら彼が多才であったとはいえ、一王族が炊事や掃除や洗濯諸々の作業に慣れているはずもなく、何より王宮内の人々が、仮にも王子にそのようなことを許すはずもない。結局セレスティナただひとりに身の回りの世話をさせることを、彼も渋々ながら了承したのだった。

王族でないのだと散々自称しておきながら、完全に下野した庶民の暮らしをすることもできない。継承権を譲渡しても、“第一王子”という鎖からは逃れられない。自己嫌悪から来る苛立ちを彼は、無愛想な態度として侍女へとぶつけてしまふのだった。

手作りの菓子に手を付けなかったのも、どう接していいのか、以前は自然にできていたはずの交流の仕方をいつの間にか見失ってしまったっていたから。

だが、つい先刻。彼は少しだけ感情を表に出してみた。というよりも、いつも身を固くしている侍女の滅多に見られない焦燥に、笑わずには居れなかったのだ。

それだけなのに、とウィアドは思う。それだけなのに、彼女はとも嬉しそうにしていた。

王子として生きることが望まれ、自身もそんな己を許すことができていた時代から、セレスティナが努力家だったことを彼は知っている。少し年上の、姉のような黒髪の侍女。食事の内容であれ、部屋の清掃方法であれ、彼女は一度言われたことについては二度と注意を受けなかった。

だからこそ第一王子は彼女を信用している。たとえ口には出さずとも。

体を伝う水滴を拭き取り、寝間着の白いローブに袖を通す。いつもの倍はあるのではないかと思われるほどの袖の長さ丈。余した布地を鬱陶しそうに振り払いつつ、足を引掛けそうになる裾を持ち上げ歩く。引き摺るほどに大きなものを着て寝ないといけないのだ、今宵は。

以前は着替えを手伝う侍女も数名いたものだが、自力で服を着るという行為にももうすっかり慣れた。最初から、別段不可能なことではなかったのだが。

寝台の脇にある小さな机の上には、これまた丁寧に置まれた衣服が一式置いてあった。普段同様の紺青を基調とした上下に、高貴の色として尊ばれる紫苑の上衣。それらはどれをとっても、少年が身に着けるには大きすぎるものばかり。

この衣装を着るのは実にひと月 三十日振りだった。

どのようにして自身の体が変わるのかウィアドは知らない。この二年、その刻を迎える際は無理にでも眠るように努めてきた。親しい者、それこそ肉親であれ、彼を気遣い“それ”が起きる夜は寝室に立ち入ることなど一切なかった。

自分の体が作り替えられていく恐怖。未だ呪われていることを実感させられる一日。普段どれだけ気丈に振舞おうが、どれだけ諦めた振りをしていようと、届かない希望を目の前にちらつかせられ、

本来ならば流れていたはずの時間を突きつけられる満月の日。

月の満ち欠けの周期は厳密だった。満月から次の満月まではきっかり三十日、天文学者らによる長年の観測が導いた結果だ。

ところで、ウイアドの部屋には暦を数えるための道具はない。否が応でも月の周期を日々意識せざるを得ないため、わざわざどこかに書き留めておく必要もないからだ。セレスティナから伝えられる王宮行事は自身が参加しないものも含め、また家族と顔を合わせる日の日程も、頭の中に入れて事足りる。

明日は弟と話をする予定がある。それから両親にもきちん顔をを見せて。……父や母とはおおよそ十日前後の間を空けつつ会っているが、弟　マーニア国第二王子、スヴェル・アルスヴィズと直に言葉を交わすのは月に一度だけだ。

体が大きくなると肉体的な面でも戸惑うことが多い。

呪いを受けるよりずっと以前から使っている部屋だから、家具の大きさが体に合わないということはないのだが、普段のもどかしさがないせいで逆に過ごしくくなる。たとえば、今も背伸びしなければ干せなかったタオルは、明日なら片手で容易に掛けることができるだろう。見上げていた娘はその頭頂部さえ見ることができるところ。

ウイアドは濡れそぼったままの銀色の髪をろくに手入れもしないで、まとわりつく大きすぎる服ごと毛布に体を滑り込ませた。さすがに髪の毛に癖がついてしまうかもしれないが、どうせ明朝にはまた湯を浴びるのだし、と思い直す。それに、セレスティナが彼の身だしなみを整えるのにいつも以上の時間を費やすだろうことは、毎月の経験からも明らかだった。

彼は早く眠りたかった。そうやって焦るくらいには緊張している。

作り替えられる自分の肉体、不可思議と超常の狭間に落ちる瞬間。目を開けた時、そこが眠る前と同じ世界である保証などどこにもない。

このまま目覚めないのならば、それはそれで、構わない。
心中で呟き、目をきつく閉じる。

月女神の力が増せば、追う獣の力もそれだけ強くなる。全ては均衡と調和の中にあり、いずれかに傾いた時が世界の変容の時。それが終末であるかどうか、願わくはこの目で見る日が来ないことを。

第12話

今日は王子との神話談義は休みだ。数日前にセレスティナを通して伝達があった。

数日間連続で通い詰めていたので、ちょうど良い小休止なのかもしれないとベルカナは思う。彼女にとっても王子と連日、長時間にわたって顔を突き合わせているのはあまり好ましい状況ではなかった。そう頻繁に会うには互いの関係は脆いし、下手をすれば疎ましがられる可能性もあり、それは彼女が抱く“目的”に対して大きな障害となる。

それでベルカナは息抜きついでに、城から歩いてすぐの場所にある神殿へと行ってみることにした。セレスティナが言っていた、ウイアドと親しい巫女と話ができればなお良い。ただし夕食は王子と卓を共にすることとなったから、それまでには戻らなければならぬ。

そう急ぐ用事でもないと余裕を持っていたら、結局はいつも王子のところへ行くのと同じような時間帯になってしまった。気楽すぎる格好もどうかかと思いはしたものの、あくまで私用で出かけるだけなのだからと自分に言い聞かせ、結果として彼女はワンピースに薄手の上着を羽織っただけという地味な服装で城の廊下を歩いていた。成人したばかりの娘が城内にやって来たということでもと話題の種だったのだらう。数日ですっかり名前を憶えられてしまっている彼女には、すれ違う侍女や官吏らも親しげに挨拶をしてくれる。全てが平穏とは言えない城の中だけれども、長閑で優しい^{のどか}空気が流れていることも確かだ。窓の外に気持ちの良い青空が見えること

もあって、休養を得たベルカナの機嫌はすこぶる良かった。

「兄上っ」

耳に届いた声に、思わずその方向を見遣る。

真っ直ぐ通り過ぎようとしていた角を曲がったその向こう、歩きながらの瞬間に横を見たベルカナの目に映ったのは二人の男性の姿。灰みがかった銀髪の少年が、瞳を輝かせながらも片方の男性を見上げている。長身の男性はベルカナに背を向けていたから顔を見ることは叶わない。だが彼らが身に纏う上衣の紫は高貴の証であり、このマーニアにおいてそう多くの人間に許された色ではない。

思考はすれど彼女は足を止めなかった。気にはなつたが、躊躇している間に、後戻りするには不自然な距離を通り過ぎてしまう。

最初は少年の側をウィアドだと思った。しかし彼はあんなに興奮気味に声を上げないだろうし、何よりどちらかといえば見覚えがある銀色を有していたのは、長身の男性の方だったのだ。

腑に落ちない感を抱きながらも、機会があれば夕飯の時にでも尋ねてみれば良いと思い直し。その出来事は頭の隅に追いやって、彼女は再び神殿を目指すのだった。

*

その石造りの建造物は本当に城の目と鼻の先にあつた。昼下がりの陽気の下を歩いても、汗ばむ暇もないくらい。

月女神マーニアを祀った聖域。外見は、平たい箱に入り口や窓がついているだけの質素な建物だが、壁面に施された彫刻は遠目でも手の込んだものとわかる。後で全面、細かく見て行こうとベルカナは思う。

田舎に住んでいた彼女が、王都にあるこの神殿を訪れるのは初めてだ。人づてに話を聞いたことはあつたものの、いざ本物を目の前

にすると緊張せずにはいられない。各地から参拝しにやって来る者もいるそうだが、そういつた一般の人間は日にせいぜい片手で数えられる程度だという。やはり大半は王宮の関係者。門をくぐってみた今もどうやら、ベルカナ以外に神殿を訪れている者はいないようだった。

まず現れたのは、脇に円柱が並んだ、まっすぐ奥に続く通路。一歩入ると中に溜まっていた冷たい空気が揺れた、気がした。外と比べて幾分か涼しいが、湿度はそう高くなさそうだ。陽光には劣る明るさもさほど問題にはならず、通路脇に立ち並ぶ像を見ることができくらい。

等間隔でそびえる石柱の一本一本の上方に、中程度の大きさをした像が飾られている。ベルカナがいる位置からは細かい表情までは見ることができないけれども、それぞれに特徴的な容姿や得物から、神話に登場する英雄や神々の像だとすぐにわかる。

足音は響くが、硬い音色が吸い込まれ消えてしまうほど通路は長くない。像を眺めながら少しゆっくりと進んだ彼女の目の前に、第二の門。

唐突に開けた場所がベルカナを出迎える。しかしそこが終点であるらしかった。広い部屋のほぼ中央に一番大きな石像が立っていたのだ。長い衣を身に纏い、頭上にはヤドリギの冠を頂き、天へ向けて掲げた手の平には象徴の球体。無論、それは月女神マーニアの像だった。

女神像の前にある祭壇には未だ新しい供物が置いてある。乙女に捧げた花束と酒杯とは、一体誰が祈った結果だろうか。

しばし像に見惚れていたベルカナは、背後から聴こえた音に慌て振り向く。彼女が先程くぐった入り口の隣にまた小さな扉があり、そこから一人の巫女が出てきたところだった。

先に声をかけたのは巫女。戸惑うベルカナのもとへとゆっくり近

づいてくる。

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

ベルカナがどきまぎしてしまったのは急に声をかけられたこともそうだが、それよりも巫女の容姿についてだった。確かに聖職者の服装をしているが、背丈はウィアドよりも小さく、まだ年端もいない幼い少女にしか見えない。

しかしそれにしては纏う空気がどこことなく大人びている。彼女は特に華美な容姿をしているわけではなかったが、人目を惹きつける何かを持っていた。あえて挙げるとすれば、腰元まで伸びた蒼く長い髪は目立つだろうか。巫女が涼しげに見上げてくるので、ベルカナは愛想笑いを保つのに些か苦勞しなければならなかった。

「良い場所ですね。気持ちが悪くなります」

「……」

ベルカナをじっと見上げてくる少女は無言のまま。しんと静まり返った水面のような深緑の双眸に、吸い込まれそうな錯覚をも覚える。

まだ何か言うべき挨拶があったのか、それとも服装がまずかったのか……落ち着きなく思案するベルカナを尻目、ずっと黙っていた巫女は微かに目を見開く。小さな唇が開かれて、零れた声も澄んだ音色。

「あなた、ウィアドに、隠し事してる」

揺るぎない指摘にベルカナは内心大いに動揺した。心当たりは確かにある一方、もしかすると別のこともかもしれないと警鐘を抑え込む。初対面の巫女に知られているはずはない、きつとこの少女は普遍的な言葉で神託の真似事でもしているのだろうか。

「……ウィアドを傷つけたら、だめ」

だが次の言葉は決定打としてベルカナを打ちのめした。その物言いかから同時に悟る……この一見して幼い少女こそ、セレスティナの言っていたラグという巫女に違いない。

「取り返しのつかないことになる前に、正直になるか、諦めるか、するべきです」

立ち尽くすベルカナに少女は軽く頭を下げ。ごめんなさい、と消え入るような声で呟くと、現れたのと同じ扉の向こうへと帰って行ってしまっ。

返事をすることも追うこともできないまま、やがてベルカナは月女神の石像を仰ぎ見留める。その無機質な瞳に、初めて畏れを感じた。

第13話

その日の晩は少し蒸した。

しかし窓辺に佇む彼が窓を開けることは許されない。バルコニーへ出る窓を鎖す、滑稽なほど頑丈な鍵を長い指でなぞり、“青年”は、部屋の入り口で茫然としている少女を振り向く。

「改めて。……マーニア国第一王子、ウイアド・アルスヴィズだ」
初めて耳にする低い声。彼の、本来の声。軽く首を傾げれば、少年の時と変わらぬ銀色に煌めく髪が揺れた。

紺青の衣の上から紫の上衣を羽織り、すらりとした長身を硝子に凭せ掛け、ウイアドは物憂げな眼差しでベルカナを見る。自然なものとして高貴の空気を纏いながら、脆く儂い危うさをも感じさせてしまうような、どこことなく浮世離れた美青年だった。

「これが……ウイアド様の……」

先に名乗られたにもかかわらず意趣返しすら思い浮かばず、ベルカナはただただ呆気にとられるばかり。ようやく発した言葉は掠れていて、彼女は初めて経験するような動悸を抑えようと必死になる。そんな少女の動揺を朱い頬に読み取っても、王子の態度は変わらない。それでも解呪の任に就いた相手にこの現象を見せる時は毎回、向こうの反応が少しだけ楽しみではあった。そのくらい楽しまなければ、現実には押し潰されてしまいそうで。

「今宵は満月。ティナから何も聞いていなかったのか？」

「いえ……」

少女は一步分後ろに退いている侍女を見遣る。だがセレスティナはさりげなく視線を逸らし、ベルカナの無言の抗議は見事に受け流された。きつと彼女はわざと教えなかったに違いない。でなければ、夕飯前に王子に会いにいくなどと奇妙な提案をするものか。ベルカナは、これからは自分で日数をきちんと数えておこうと密かに決

意する。

「ウイアド様、ベルカナ様がラグ様にお会いしたそうですよ」

「ラグに？」

そのまま、珍しくセレスティナが発言する。目を睜り驚嘆を呟くウイアド。

「神殿へ行ったのか」

「はい。……あ、何か、不思議な言葉をいただきました」

ベルカナは問いかけに慌てて応じてから、己の軽率さを呪う。案の定ウイアドは怪訝そうに柳眉を寄せた。

「不思議、とは？」

「……」

神託の真似事だと決めつけてしまえば、わずかな可能性に賭けることもできたのだが。平静を保とうと必死になった拳句に口を滑らせてしまつては世話がない。

答えあぐねているベルカナをウイアドはしばし見つめていたが、やがて再び窓の外へと目を移した。夜になって急に雲が出てきたようだ。

「……月の光が問題ではないらしい。この体は、如何に暗い夜であろうとも、満ち欠けを知っている」

官能的であるより以前にひどく落ち着いた声色は、洗練された言葉遣いと相まって、少女の鼓膜を心地好く震わせる。ベルカナは故郷でウイアドより年上の人間とも接してきたが、その誰よりも大人びた印象を受けるのは、果たして生まれや育ちの違いゆえというだけだろうか。

彼は少しの間硝子越しに宵闇を眺めていたが、ベルカナ達へ顔を向けることもないまま、少しだけ声を大きくする。

「彼女も辛い幼少時代を過ごしたからな」

彼女、というのがラグを指すのだと、一拍遅れて気付く。

「も」？

「あれで私と同じ年なのだと言ったら驚くか？」

「え?!」

ベルカナは思わず素っ頓狂な声をあげてしまつてから、急いで両手で口元を覆う。

「し、失礼いたしました……!」

礼を欠いた反応だつたとわかつているとはいえ、ウィアドの言葉は冗談としか思えなかつた。彼と同じ年だとすれば、ベルカナの腰ほどまでしか背のなかつた彼女は二十四歳ということになる。見た目や話し方、どこをとってみても年上であるとは信じ難い。

そこで彼女はひとつの可能性に思い至つた。……が。

「ラグは呪われてなどいないよ」

ベルカナの考えを読んだかのようにウィアドが言う。

「彼女は生まれつき、他人の心にひどく敏感だつた。人並み外れて鋭い勘……読心術というほどのものではないらしいが」

「読心術……」

「そのせいかどうか、もともと体が弱くてね。何年も前から背は伸びていないよ」

“異常”だという言葉は使いたくはなかつた。代わりに、「小さかつたろう?」と、ウィアドはまるで自分のことのように苦笑する。一方のベルカナは、先程とはまた違つた種類の動悸に苛まれていた。何を巫女に言われたかウィアドに話さなくてよかつた、と心底思う。と同時に、ラグ本人からウィアドに何か伝わってしまうのではないかと気が気ではない。

「あ、あの。ラグ様とは頻繁にお会いするのですか?」

「いや……私は神殿にも行かない。今でも父上や母上は参拝なさつていそうだが、彼女はそもそも人と滅多に話したからないしな」ならばとりあえずは安心できるだろうか。完全に不安は拭いきれないものの、唐突にベルカナの“心の内”が広まることはないはずだ。

「……しかし、スヴェルまで神殿への参拝をやめたのはまずいな。民への示しが見つからないだろうに」

珍しく愚痴のようにひとりごちたウイアド。

スヴェル。マーニア国の人間ならば知らない者はいないだろうその名前を耳にし、ベルカナは昼間の出来事を思い出す。小さく声を上げた彼女を二組の瞳が見た。

「どうかしたのか」

「ウイアド様、今日のお昼頃ですが、スヴェル様とお会いしていましたか？」

「今日の昼？ …… ああ」

神殿へ行く途中、城内の廊下でベルカナが目撃した光景。くすんだ銀髪の少年は目の前の人物を「兄」と呼んでいた……。つまりスヴェルとはマーニア国第二王子の名、ウイアドの弟のことなのだ。案の定、立派な青年の姿をした第一王子は首肯してみせる。

「なんだ、見ていたのか」

「あ、いえ、そのようなつもりは……」

あたふたと両手を振るベルカナは完全に年相応の少女。それを見て、王子の代わりにセレスティナが笑う。

控え目ではあるが楽しげな声にベルカナは我に返る。誤魔化すように小さく咳を一つ。

「で、でも廊下でお話されていたので」

「私は彼の部屋に向かうところだったのだが、本人が先に迎えに来てしまったな。実にひと月ぶりだ、彼の気持ちもわからなくはないが」

「ひと月？ 陛下や王妃様とはもう少し頻繁にお会いになつていますよね？」

「純粋な疑問を口にしてしまったのはどうやらまずかったですね。」

一瞬、空気が固まる。

先に動いたのはセレスティナ。これ以上の話題の発展を遮るかのように、「お食事のご用意を致しますね」と丁寧に一礼して退出する。

「スヴェルとは月に一度、満月の日だけ会えばいいんだ」

だから、淡々と応じたウイアドの言葉に、ベルカナは首を捻りつつも引き下がる他なかったのである。

第14話

朝方に届けられた書簡を手に、ベルカナは私室でひとり溜息を吐いた。送り主は言わずもがな彼女の父親である。

「愛されていらっしやるのですねえ」と、手紙を渡す時にセレスティナはこころ笑っていた。

だが単に過保護であるというだけなら、ベルカナはここまで顔をしかめて文字の羅列を睨みつけたりしない。彼女が父親の代わりに城内へと入った目的の再確認。現状報告の要求。

板挟み　父親の要望を叶えれば王子を裏切ることになり、かといって父親の言い分も無碍にはできず。

悶々と悩む彼女の頭に、ふと、神殿の巫女の言葉がよぎる。

『取り返しのつかないことになる前に、正直になるか、諦めるか、するべきです』

「取り返しのつかないこと、か……」

このままではまずいということにはわかっている。ウィアドは少なくとも表面上はベルカナを信用してくれているように見えたし、心を読んだという巫女も恐らくは、ベルカナ自身の口で語るまでは彼女の本心を吹聴してまわるようなことはないだろう。

自分の格好を見下ろす。地味な色合いの服はもちろん絹製などではない。視界に入った栗色の髪の毛は本当に櫛で簡単に梳いただけで、穂先はよく見ると傷んでしまっただけ。特別に目を惹くような美貌でもなし、このまま父親の言う目的を達成するのは些か困難であるだろうことは、想像に容易かった。

それにベルカナ自身、気乗りしていないことなど、もはや自分で十分に気付いている。

いずれの立場をとるにせよ、そろそろ決断するべきなのかもしれない。

*

今日も王子と語り合う予定はない。

暇を得た彼女が選んだのは、もう一度ラグに会うという選択肢。正直に言ってあまり気は進まなかったが、結局ウィアドのことを何も聞き出せていなかったことに思い至ったからだ。

神殿への行き方は以前わかったので、今回は少し違う道を通ってみようと初めての小路へ逸れる。低木の茂みが並ぶ道をそのまま進むと、見えてきたのは広々とした庭園だった。

足を踏み入れていいものか……わずかに逡巡したベルカナだったが、とうとう思い切って、蔦の絡んだ細い金属の門をくぐる。途端に広がった景色に思わず息を呑んだ。

灌木の茂みで区切られた場所にはそれぞれ色とりどりの花々。故郷の自然とはまた違って人為的に手入れされているおかげで、大輪の赤を咲かせた薔薇でさえ慎ましやかな印象を受ける。どこまでも続くかに思われる花の路は、奥の方で迷路のように入り組んでいるのが見えた。

ふらふらと誘い込まれるように進み、一際強い香につられて白の花へと身を屈めたベルカナは、背後から急速に近づく忙しない足音に気付かなかった。

「隠してっ！」

「えっ ?！」

澄んだ子供の声。と同時に、驚く暇もなく背中に衝撃を受け、彼女は大手鞠の茂みに顔を突っ込んでしまう。薔薇でなくてよかったと切に思った。

身を起こそうにも、両肩に異常な負荷がかかっているため叶わない。苛立ちを抑えつつ耳を澄ますと、彼女の背中から聞こえてくる

息切れの音と子供特有の押し殺したような歓声。どうやらどこぞの子供がベルカナの肩にしがみつき、今しがた駆けて来た大人達の間から身を隠しているらしい。

「確かにこのあたりに……」「きつとあちらの方向に違いない」「よし、追うぞ！」云々。茂みの向こうでのやり取りが遠ざかってしまふまで、ベルカナは律儀にもその体勢のまままで耐えていた。

「……もう行つたかな？」

そして背後からの独り言。人を唐突に突き飛ばしておきながら何と呑気なことだろう。両手が肩から離されたのを機に、彼女は説教のひとつでもしてやるくらいの勢いで振り返った。

「ちよつと、あな」

た、まで言う前にベルカナはその姿勢のまま硬直した。

そこにいた少年が子供というほど幼くはなかったせいばかりではない。彼は……紫色の上衣を纏っていた。

「……スヴェル様？」

見覚えのあるくすんだ銀髪。恐る恐る尋ねてみれば、マーニア国第二王子、スヴェル・アルスヴィズは満面の笑みでうなずく。

「よく知っていたね」

やや華奢な体つきに、鼻筋の通った気品ある顔立ちはまさしく血筋と評するべきか。

それでも兄はどちらかといえば涼しげな目元をしているのに対し、弟は人懐こそうな小動物を思わせる真つ黒な瞳でベルカナを見つめている。興味津々といった様子の目の輝きは、常に沈着なウィアドには見られないものだ。

「あの、あ、どうしてスヴェル様がこんなところに……？」

予期せぬ遭遇に戸惑いを隠せないベルカナは、どうにかそれだけを口にするのが精一杯。対する第二王子は無邪気な笑顔のまま、

「逃げてきたんだ」

などとあっさり告白してみせた。開いた口が塞がらない少女に尚も畳みかける。

「兵学なんて、戦をしないこの国で必要になるとは思わないでしょ？ だから、逃げてきた」

では先程この少年を追いかけていた彼らは、脱走した王子を勉強へと連れ戻そうと探していたのだ。

呆れかえるベルカナに対し、スヴェルは好奇心を押し殺そうともせずに身を乗り出す。

「それで君は？ 見たところ城の人ではないようだけど」

地味な見た目のことを言われているのだと気付き、少女はさっと頬に血を上らせた。というより以前に、まず名乗っておくべきだったと自分の失態に幾分か思考が冷める。

「し、失礼を致しました。わたくしは、この度ウイアド様の解呪の任へ就くよう陛下より御命令を賜りました、ベルカナと申します」

「ふうん。歳はいくつ？」

「はい。先頃、十八の誕生日を迎えたばかりにございます」

「あ、なら僕よりもひとつ年上なんだね」

となるとスヴェルは未だ成人していない。だが、感じるのはそこはかとなし違和感。いくら数字の上では子供である ウイアドとは七つ違いか とはいえ、彼の振る舞いの端々にはあどけなさすら感じる。単に兄であるウイアドがすっかりし過ぎていただけなのか？

「ところで、カイジユ、って？」

「え？ ……あ、ええと。ウイアド様の、その、二年前にかけられてしまった呪いを……」

「んー、君の言っていることがよくわからないのだけど……」
ところが。

「だって兄上は“呪われてなんかいない”よ」

「は……え、と仰いますと」

如何にも真剣に言ったスヴェル。黒い瞳に純粹な昏い色くらくらを見て取り、ベルカナは言葉尻を飲み込まざるを得なかった。少年の中でその言葉は真実であるに違いなく、そこでようやくウイアドの言っ

いた意味を理解したから。

『スヴェルとは月に一度だけ会えばいいんだ』

月に一度、ウィアドが元の姿に戻ることができる日だけ。

図らずも災厄の余波を目の前の少年にまで見ることとなり、彼女は紅潮させていた頬を一気に青ざめさせた。魔女のもたらした呪いの傷跡は、こんなにも大きく深い。

「兄上は僕の永遠の憧れでね。きっと父上に負けないくらいの名君になるよ！」

朗らかに言い放たれた言葉にベルカナは憤りを覚えた。

……否。彼女が憤懣ふんまんを抱いているのは、スヴェルに対してではなかった。

第15話

「ウイアド様っ！」

少女の怒号が第一王子の私室の空気を震わせたのは、農夫達に終業を報せる夕の鐘が鳴る時分。机に向かって書き物をしていたウイアドは、挨拶もなしに飛び込んできたベルカナを半身ごと振り返る見れば、いつも穏やかで理知的な娘は興奮に顔を上気させており、そのただならぬ様子に、咎めるより先に彼は驚愕で手一杯であった。足音も荒くウイアドの目の前に立った彼女はそこでようやく「失礼しました」と投げ遣りに呟いた。が、それが謝罪ではなく単なる入室のための文言であるのは自明。彼女はどうかやら何事かについて相当に腹を立てているらしい。

夕餉の間にはまだ早い。何事か、とウイアドが尋ねるより先にベルカナが叫ぶ。

「どうということですかッ！」

「何がだ」

いきなり怒鳴り込まれて良い気分になどなるはずもない。見上げるウイアドも顔をしかめる。

ただ　ベルカナ自身にも、どうして自分がこれほどまでに腹を立てているのかわからなかった。しかし考えるより先に体が動いてしまっていた、言葉が溢れてしまっていた。

「つい先程、スヴェル様とお会いしました」

ウイアドの柳眉がわずかに跳ねる。ベルカナはスヴェルと別れてから当初の予定を変更し、そのままの勢いでウイアドの部屋へやってきたというわけだ。

「どうして事実をお教えしないのですか」

「……どういう意味だ」

「スヴェル様はウイアド様の呪いをお認めにならない」

「……」

彼が下唇に齒を立てたのは一瞬のこと。直後には既に、少年の濃紺の瞳は冴え冴えとした冷たさで覆われる。

「まさかスヴェル様は本当にご存知ないのですか？」

「それはない」

きつぱりと遮る。ウイアドはもはや完全に椅子の向きを反転させ、未だに小さく体を震わせている娘を、腕を組んだ状態で見上げた。

「それはあり得ない。マーニア国第一王子ウイアド・アルスヴィズは二年前のあの日に死んだ。これだけ近くにいて肉親の死を知らないことなどあるまい。ただスヴェルは“認められない”だけだ。この容姿ですれ違おうとも声をかけることはない。兄が年端もいかぬ少年であると、受け入れられないのだろうな」

「だからっ、それは」

「私が解せないのは君がそこまで怒る理由だ。もしも現実を直視できないことを責めるのなら、スヴェルに直接言えばよい」

「そうではなくて！」

思いが言葉にならないもどかしさ。せつかく築いてきた関係を張りつめさせたことに対してでもベルカナは自己嫌悪を感じ始めていた。しかし言わなければ気が済まないことがある、それは多分。

「家族にまで存在を認められないなどと、そのような寂しいことがありますか！」

ベルカナの家族との関係が頗る良好であつたせいもあるかもしれない。世間並に反発することもあれど、肉親への情愛という根幹は揺るぎなかつたから。

ともかく。呪いを受けて以降の彼もウイアド・アルスヴィズに違いないのだ。彼は彼のまま、中身は変わりないというのに。本人が死を望んでいるのかもしれない、それでも、彼をウイアドと認めない者がいることが、さらにその現実を当人が受け入れてしまつてい

ることが、ベルカナには悲しくて仕方がなかつた。

「……スヴェルは今、大事な時期にある」

しばしの間を置き、少しだけ小さな声でウイアドは言う。

「余計な問題は彼を惑わすのみならず、国をも揺るがしかねない。

マーニアの未来はもはや彼に託されるしかないのだ」

「しかし王位継承権は」

ベルカナは疑問を口にしようとして思いとどまる。それが愚問であることに気付いたのだ。

「弟が王位を継ぐことにに関して心配はしていない。往々にして二番手というのは先んずるものと比べられるが、あれは単に私の後ろで微笑んでいるのが好きだっただけで……否、私がいたからそうせざるを得なかっただけで、純粋な政や剣技まじつじゆの才では何ら遜色ない結果を出している」

淡々と。

「彼が次期国王となることに異論を唱える者もある。確かにまだ大人になりきれていない面もあるが、成人の儀を経れば文句のつけようもあるまい」

スヴェルは十七歳、そして成人として社会に認められるのは十八歳から。あの少年が冠を戴く日はそう遠くない。

もしそうなってしまうえば、と、そこでベルカナは大きな問題に気付いてしまう。本当に今更の問題に。

ウイアドは死んだものだと思われている。国王が一度はそれはウイアドに対しての話ではあったが、譲位を宣言した手前、スヴェルの名前を知る彼らはもう第二王子が後を継ぐものと信じているだろう。成人と同時に彼が即位しなければ逆に訝しむに違いない。ウイアドのことさえ隠している王家としては、国民に疑念を抱かれることは決して好ましくないはず。

だが。

スヴェルが王位を継げば必然的に、第一王子という肩書きは何の意味も成さなくなる。彼の居場所は？

それと……自分の役割は？

地下牢に囚われているという大勢の学者や医師達、彼らはどうし

て解呪の任を解かれたのか。皆が皆、途中で諦めたわけではないだろう。であるなら、この任務には期限がある可能性が高い。

ベルカナの父のような無名の学者にまで声がかかった理由も納得がいく。恐らく各人に与えられる時間の猶予はそう長くない。失敗に次ぐ失敗、次から次へと新しい人間を呼び寄せ、すぐに成果を出すことができなければ牢へ放り込み、また別の人間を召喚する。要するに数を撃っているのだ。

少女は自身の内側で潮が引く音を聞いた気がした。自分の任期はいつまでなのか？

「じきに私の名は民の記憶から消えるだろう」

銀色の長い睫毛まつげが伏せられる。

自棄になっっているだけだと指摘するのは簡単だ。王家の方針を糾弾することも造作ない。しかし所詮、他人は表に見える判断材料しか持たない。ここにきてベルカナは、ウイアドに生を奨めることが本当に正しいのかどうか自信を保てなくなっていた。その上、むしろ彼は己のために人の命が捧げられることをまるで良しとしない人物。

国王が、難儀な事情を苦々しく思う。動悸が止まらない。

親は子を救いたがために、子が望まないと知りながらも、その方法に縊すがらざるを得ない。

弟は兄に英雄を見、憧れの像を頑なに守り続ける。

そしてウイアドはいずれの幻想をも保つために心を砕いているのだ。無用の命ならばせめて誰をも傷つけないように 彼の言葉は虚言ではなかった。

「……ウイアド様は本当にそれでよろしいのですか」

「スヴェルの、ひいてはマーニアのためになるのなら。長い目で見れば、この方が民にとっては幸せだ」

「でも貴方は幸せじゃない！」

「だが私は生きている」

反駁は静かな、されど確固たるものだった。

「友は死んだ。だが私はこうして命を得た。呪詛が付きまとおうとも……これを幸福とせずして他に何を望むことができると言っただ」

唇を引き結んだベルカナにウィアドは背を向ける。

「用が済んだのなら戻るがいい」

語るのは少年の声。それでも少女が抗うことは許されない、重み。どちらにせよ彼女にはこれ以上言うべき言葉はなかった。

「失礼します」と今度は少しだけ張りのある声を無理に作り、机へ向かう小さな背中をわざと視界には入れないようにして退出したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2965w/>

幸福の天秤

2011年10月10日03時21分発行